

特250

566

貯蓄實踐成功談集

法人團 全國貯蓄銀行協會



始



特250  
566



貯蓄實踐成功談集



目次

草鞋長者	一等當選	横須賀市	秋山健二……一
のじ餅貯金	二等當選	東京市	山賀糸子……二七
雨、後晴れ	三等當選	新潟縣	南香平……三四
一萬圓貯蓄を完成し療養しつつ、更に一萬圓へ			
	三等當選	東京府	岩瀬又吉……五〇
半世紀の精進	三等當選	富山市	青木周三……六六
家船の船頭	三等當選	新潟縣	野口三史郎……八〇
誘惑と闘つて	三等當選	埼玉縣	井原隆吉……九六

貯蓄實踐成功談集

(各編共無断轉載、上演、上映を禁ず)

一等當選

草鞋長者

横須賀市逸見町

秋山健三

箱根八里は馬でも越すが

越すに越されぬ大井川

の、歌に名高き、あの大井川を知る程のもので、其河畔に聳え立つて居る、あの白壁の土蔵に圍まれた「草鞋長者」の家を知らぬものは、おそらくあるまい。

此家の主人平口儀平を、村人が何故「草鞋長者」と呼ぶか、それには斯様な譯がある。

儀平はもと頗る貧乏な百姓であつたが、言ふに言はれぬ悲痛な動機に發奮して以來、今日迄

彼が、足から草鞋を離したのを、殆ど見た事がないと言はるゝ程、刻苦精勵して、遂に、五萬と呼聲の掛る現在の資産を築いた。村人は、其の間に於ける彼の奮闘と彼の義理堅さに、全く敬服して「儀平さんの身代は、汗の固まつた尊い身代だ、儀平さんの足の裏には、草鞋の痕跡がくつついてるさうな」と、噂し合つた擧句の果に、到頭「草鞋長者」に祀り上げ、村の勵みの的として居る。

### 悲しき動機

日露戦争眞最中の明治三十七年十一月、儀平が丁度五十の時、彼が男手一つに育て上げて、杖とも柱とも頼る一人息子の太吉は、輝く武勳を残して、第四回旅順總攻撃の花と散つて終つた。其上に、健氣を誇つた嫁のお佐和も、太吉の村葬が済んだ翌日、烈しい精神衝撃のためか、急に産氣附いて、現在の「喜一」を二ヶ月も早く早産した。剩さへ、産後の肥立が甚だ悪く、餘病も併發して、五十日も寝ついた末に、到頭彼世へ旅立つた。が、追に臨終の直前迄、此世に残す「喜一」の身の上を案じたらしく、病み巻けた唇を、やつと動かして、讒言の様に、彼女は最後の歎願を舅にした。

「おとつさん……どうか、喜一を、可愛がつて、大きくして……」と、言ふ聲も仕舞には掠れて聞き取れなかつた。

儀平は、嫁の耳の側で、大きな聲で

「お佐和、喜一のこたあ案じんでよいが、俺が立派に育てるでなあ、迷はずゆくとこへゆくんだぞ、ええか」と、斷腸の思で言つた。すると、お佐和は微に頷いて、安堵の笑さえ浮べ、スウ／＼と、眠る様に息を引いたのだつた。

儀平は全くガツカリしたが、ともあれ、野邊の送りは済した。

そして何気なく、お佐和の敷蒲團の下から出た紙包を開いて見ると、其中には、厚紙の封筒に入れた一通の貯金通帳があつた。それも、まだ生れぬ我が子のために、戦死した太吉が出征一寸前から始めたもので、封筒の表には、太吉の筆跡で

父は若い時から小生のために苦勞して來た。假令小生が戦死しても、父に丈は孝行して呉れ、此の貯金十圓は小生が丹精したものだから、生れた子が男なら三十になる迄引き出さぬ様に、幾等か宛でも積み足して呉れ、そして子供にはどうか貧乏させて呉れる

な、是が小生の最後の願だ、呉々も頼むぞ、小生は命を捨て、戦ふ決心なれば、生きて再び逢えと思ふな、さらば。

明治三十七年七月十日

出征の朝

太吉書之

佐和殿

と、したためてあつた。

儀平は堪らなくなつた、そして、五臓の軋る様な呻聲をあげて、オイ／＼と泣き乍らも、彼は、孝行な倅夫婦に、全然、親甲斐と言ふものを見せず終へた事が、情なくて、情なくて、仕様がなかつた。

彼は、小一時も、泣いたり考えたりした揚句、何を思つたか、眉宇に決然たる色を漂して、傍に寝かして置いた稚子の喜一を抱き上げると共に

「喜一、おぢいはなあ、お前が三十になる迄は生きてるぞ、ほほしてなあ、お前のおとうの心掛けたホウラ此の貯金を、うんとこさ積んでやるぞよ、お前にや決して貧乏させんから、早く大つかくなつて呉れよ」

かう言つてヨイヨイし乍ら、不幸な初孫の顔を凝視する儀平の眼底には、既に涙は乾いて居た

そして明日の奮起、しかも、三十年出さずの貯金に對する、新しき希望が烈火の様に燃え榮へて居た。

### 最初の十年

五十の坂を踏んだ儀平が、其胸に秘めた三十年計畫こそ、全く悲壯そのものであつた。

彼は先づ第一に、日常信賴する長閑寺の住職に自分の決心を打ち明けた。

住職は、彼の決心と事情を聞いた後

「ほう、それやどえらい元氣だ、儀平さんなら屹度出来る、そこでだ、私も坊主の義務として一枚加はりたい、と言ふのは外でもない、あの喜イ坊を、學校に上る迄、私が預かるうではないか、立派に躑けて上げるぞ、どうか、儀平さん」と、住職は彼の返事を促す様な眼光で、彼の顔をしげしげと見乍ら尙も言つた「さいはい私とこのおんばあも子供が好きで、丁度よいではないか」

住職の言葉は、儀平にとつて、地獄で佛以上に有難かつた、勿論、おんばさんも側で頻にすゝめて呉れるので、彼は頑丈な手を疊に突いて、感激に満ちた木訥な返事をした。

「有難いこんだ、どうか、おつさん、おんばさん、何分御願ひ申すだ」  
住職夫婦は大きく頷いて快諾した。

思も寄らぬ喜一の保育者を得て儀平の心の雲は、全く晴れた、彼は意を決して、前から話のあつた村役場の使丁に採用して貰つた。

そして、實直に勤務する傍、三反歩近い田畑を熱心に小作した、朝早く起きて田畑を見廻り、役場が退けてから暗くなる迄、寸暇を惜しんで野良に立ち、稲田の除草もした、害虫の駆除もした。肥料も施した。その他一切の農事に人手を借りない彼の忙しさは、彼自身ですら「よく是で身體が續く」と思つたが、それでも、どうにか秋に漕ぎつけると、年貢米を差引ても、彼の飯米には困らぬ丈の米が、彼の手に残るのが何より嬉しかつた。

此の外に彼は、間作と畑作の野菜や雑穀を賣つて、其の収入で諸義理諸費用を辨じ、尙幾らでも餘れば、不時の用意として、丹念に別貯蓄をした。そして兎に角、村役場から頂く月八圓の給料には、一切手付けず其儘三十年貯蓄に積み込んだのである。

儀平は、全くの餘暇を利用して、是程の百姓をする働き手であるから、村役場の仕事に對する彼の眞剣さは實に涙ぐまじきものがあつた、走り使は敏速確實を旨とし、其の他は、何時も役

場内で拭掃除や薪割等に始終働き詰だつた。

村長は自分の眼識を誇るかの如く、誰の前でも、儀平を賞揚して

「實によい使丁だ、あれが入つてから役場は見違える程綺麗になつた。それに非常に丹精な男だから、薪は殆ど廢物や河原木で、間に合せて居るらしい、まるで役場の費用を、わが身上の様に大事にするのだから有難い、お蔭で役場の雜費はうんと減じて、あれの給料は浮き出るよ、全く大助りだ」と、言ふのであつた。勿論、吏員も議員も皆異口同音に彼を激賞した。

かうした奮闘に、十年間は夢の間に流れた、彼は還曆を迎えたが、まだ、壯者を凌ぐ嬰傑さだつた。

八ツの年に長閑寺から連れ戻した喜一は、今はもう尋常四年になつて居た、無論、住職夫婦の躰のよさが現れて、他の村童とは比較にならぬ、豊かな情操と明敏な頭腦とを持つた健康兒であつた、喜一は勉強が濟むと、毎晩の様に、儀平の肩や腰を揉みたがるので、或夜儀平は喜一に聞いた。

「お前何故そんなにおじいを揉みたがるのだい」  
喜一は不審氣に、儀平の顔を覗き込んで

「うん、おじいさん、人間はネ、お寺のおつさんが毎朝毎晩本堂でお勤めする様に、誰でも、何か一つは、心の勤めを持つてなければ駄目だつて、僕おつさんにおそはつたよ、それに僕家に歸る時にも亦、おつさんに言はれたよ「喜一はおぢいさんに孝行するのを勤めにせよつて」だから僕揉むんだよ」と、可愛い口調で答えた。

儀平は思はず臉を熱くさせて、心の中で長閑寺の住職を拜んだ。そして、彼は不圖氣附いた様に、此のよき孫に譲るべき十年苦心の貯金通帳を取り出して、其の金高を見ると正に一千三百圓を突破して居た。

儀平は我れ乍ら驚いて、間違いではないかと算盤を取つた。

「エ、と、最初が十圓、俺の給料が年に九十六圓として十年分の九百六十圓、太吉の一時賜金が百五十圓と……あゝ、そうだ、利子もくつついてるなあ、やつぱし、其位にはなるのだなあ」と、彼はつくづく貯金の有難さを悟つた。そして、もうひと馬力もふた馬力も、頑張る決心の膽を固めたのである。

## 中の十年

儀平は、十年目の一段落に、豫期以上の結果を納めたので、更に勇氣百倍して、餘念なく野良仕事に勵んで居た或る日曜日の晝時、ヒョッコリ長閑寺の住職が野良に顔を出して、種々と話し込んだ。

其の話に依ると、町井と言ふ村の物持が、島田田地を賣に出した、それも、負債整理の必要上至急金に替へたい爲に、格安に賣ると言ふのであつた。

「かう言ふ譯でな、私も町井から相談を受けて見れば、永年寺總代をして貰つた關係もあるし、さう木で鼻コクツタ様な返事も出来ん。で、お前さんに相談だが、どうだろう、國道添ひに三反歩の小口があるが、私の代りに買つてやつては呉れまいか」

住職から、こんな風に頼み込まれて、儀平は困つた。けれ共、住職が八年間も喜一を養育して呉れた恩義の前には、假令何であろうと、住職の言葉に背く事は出来ない、彼は思つたので、餘儀なく、別口の貯金を全部出し拂つて其の田地を買ひ取つた。そして、ともあれ、此の秋から十俵の作米を受け取る身分に、一段飛び上つた、彼は何だか恥しい様な、其辭踊り立つても見たい様な、名状し難い歡喜を意識して、北叟笑みつゝ、相も變らず黙々と、役場に野良に働き續けた。

勿論、當時の彼はたゞ働く事だけが能事で、世の中の推移等には、まるで無頓著であつたが、歐州戦争を契機として順次上向の姿勢をとり、大正八九年を絶頂とした、あの物凄い好景気には、流石の彼も魂消ざるを得なかつた、鐵成金……船成金……株成金……種々な成金が、雨後の筍の様に簇出した、そして、それらの成金者は皆極端な榮耀榮華に耽つて居た。

儀平の村でも、田地畑を質に置いて、思惑に乗り出して、小成金になつたものもあつた、否小成金にならぬ迄も、大概の村人は、幾等か宛は思惑をして居た。村の周旋屋は、彼の顔を見る度に

「儀平さん、こんな時に金を寝かしとく手はない、物を買つときさえすれば、屹度儲かるに極つてるじゃないか。みんなは無理しても買ひ込むがなあ」と、うるさく附纏つて、山を買へ、田を買へ、株を買へと、何時も彼を嚇かけた。其の頃は、彼の貯金も相當纏まつて居たし、義理で買はされた島田田地は、買價の五倍にも騰貴して居たので、彼も少なからず迷つた擧句、長閑寺を訪れて相談して見た。すると住職は一笑に附して、次に言つた。

「儀平さん騙されぬ様にな、眉に唾つけて、此の狐景氣の樂屋をよつくお見よ、ほんとの景氣つてものは、此の三一もあらせんが、機會を利用する事に得手てる一部の狐共が、まだ騰るまだ騰るで無暗に買煽るから、幾等でも騰るのだよ。だから我れ我れ素人が、是から物を買はうと思ふ時分には、今迄樂屋で買煽つた狐共は、もうたんまり儲けて賣り拂つた後だ。さぞ今頃は赤い舌を出して笑つてるだろう、ワナに引つ掛つちや駄目だ、ワナに。それに物を買つといつて、相場の変動で儲けようとする事自體が、既に貯蓄家としては、邪道だな、お前さんの様な立派な貯蓄家の行くべき道では斷じてない、儀平さん我慢が肝腎だ、今にお前さんの懐の中で、流行廢りのない好景氣が、屹度芽を出すから、急らんで待つてなさい」

儀平は、頭から冷水をぶつけられた様に、慄然として迷の夢から醒めた。住職の豫言は美事に適中して、狐景氣の大反動が、やつて來た。

物價大暴落……破産者簇出

無論、槿花一朝の榮を誇つた大小の成金は、一齊に奈落の底に轉落したが、儀平の景氣は益々よくなる一方であつた、

大正十四年二月、彼は滿二十ヶ年勤續で表彰されたのをよい潮に、惜しがらるゝうちが花と役場を止した。喜一は既に師範を出て小學校に奉職して居た。



儀平は七十一になり、三十年計畫の三分の二を、無事に踏破したのである。

彼の貯金通帳は、最初の十年に比較すると、正に驚異的躍進を示して、五千圓の上に頭が出て居た。亦別口も再び五百圓近くなつて居た。勿論、それは、彼の給料の増加と、島田田地の収入及役場から頂いた退職手当等が、彼に齎した福音である。

金を作ると共に人間を作つた儀平は、其頃は、もう平凡な水呑百姓ではなかつた。殊に勤儉貯蓄に對しては、一大見識を持つて居た。そして、最後の十年へ最後の十年へと土煙を上げて驀に進した。

## 最後の十年

儀平は役場を止してから、幾分身體に餘裕が生じたので、別口から三百圓を引き出して、原野一町歩を買ひ、間がな隙がな切々と開墾して、それに茶種を播いた。

村人は皆、彼の奮闘に舌を捲いて

「儀平さん、工面がよくなると、仕事が面白くなるつて言ふが、ほんとかい、随分精が出るのう」と、何時も言ふのであつた。

儀平は、それに答えて

「あゝ、そだ、全く面白くなるのう、それに、私はなあ、昨今つくづく考えるよ、何も忤が戦死したから言ふのじゃないが、兵隊は弾で死に、學者は本を抱えて死に、百姓は鋤の柄を握つて死ぬ位の覺悟でなきや、是からの日本を持ち堪えることあ出来まいとな、だでよ、私は野良で死に度いと思つて、毎日かうやつて働いてるがなハツ〜〜」

と、童顔を崩して、小氣味よく打笑つた。

村人は、儀平の旺盛な氣力に打たれて、しまひには、彼に貯蓄の指導を仰ぐ様になつた。彼はさうした人々に對し、必ず甲乙二冊の貯金通帳を所持せしめ甲は三十年間絶對据置を強調し、乙は不時の用意とせしめた後「先ず精出して働きなさい、働けば自然に身體が壯健になる、そして儉約すれば必ず貯金が増える、貯金が増えれば世帯の苦勞が無くなる、世帯の苦勞が無くなればよく眠る、よく眠れば疲れが取れる、疲れが取れると幾等でも働ける、愈々身體は壯健になり、益々貯金は増える、……………まあ、こんな具合にグル〜廻りして居る間に、三十年位は直立つて終ふが、其の間に唯二ツ丈禁物がある。

第一の禁物は、途中で止す事

第二の禁物は、少し纏まると引出して物を買ひ度くなる事だ。

此の二ツさえ氣を附ければ、なかに、私位の貯金は誰にも出来る、嘘ではない、やつて見なさい、屹度出来る」と、絶えず鞭撻した。かくして、儀平を師表に仰ぐものは、愈々増加し、彼の傘下は賑つた。そして、遂に、三十年會と稱する貯蓄組合が結成された。

儀平は、寢食を忘れて三十年會を指導しつゝも、長閑寺の住職が、是ならと見込んで、喜一に世話して呉れた、孫嫁の勝子を相手に、屹々と働いて、到頭一町歩の原野を見事な茶畑にした。一方、彼の所有する島田地は、島田町の大発展に連れて、だん／＼價値が出て、今は既に全部が宅地になつた。しかも、其の内二百坪は、さる人に懇望されて、坪三十圓で、賣却した。

喜一夫婦は至極壯健であるし、曾孫の國藏は、最早三ツになり、片言交の「オヂイチャン」を言ふ様になつたので、彼は全く安心した。斯くて、最後の十年を経過した儀平の三十年貯金は、彼が、八十一を迎えた昭和十年二月五日に、實に輝かしい實を結んで満期となつた。彼の貯金は高金利時代を通過した爲と、喜一の俸給や宅地二百坪の代金加つたので、驚く勿れ、二萬圓を遙かに抜いて居た。其上、殘餘の宅地七百坪は、足でさん出して、萬圓の價値はある。

肥沃な茶畑、三反歩の自作田、白壁の土藏等は、皆、彼の血涙史を飾る勤儉貯蓄の副産物であ

る。

漸く、肩の重荷を降してホツとした彼は、まるで昨日の事のように思へる、三十年前の種々の情景を、暫時心の中で現像して居たが、總て「あの貧乏が三十年位で、よくも是丈に仕上つたものだ」と、獨言し乍ら、今更の様に、我が家の白い藏を見上げて、感慨無量の面持であつた。

其夜、儀平は、大恩ある長閑寺の住職を招待して、水入らずの小宴を張つた。其席上で二萬餘圓の貯金通帳は、お佐和の敷蒲團の下から出た太吉の遺書とも言ふべき、あの厚紙の封筒に入れて、そつくり其儘喜一の手に譲られたのである。

喜一夫婦は感激してオイ／＼泣いた。儀平の眼にも住職の眼にも嬉し涙の露が光つて居た。曾孫の國藏は、儀平の膝の上で、可愛い眼をクル／＼させて、不審氣に、みんなの顔を見廻して居た。住職は儀平の健闘を稱へ、儀平は住職の恩を謝し、今宵の小宴は夜の更くる迄打ち續いた。村人も亦、「儀平あつての長閑寺、長閑寺あつての儀平」だと、此の俊傑二人を、同時に賞揚して止まぬのである。

儀平は、今、事變下に於ける貯蓄の緊要を鼓吹する爲に、毎日草鞋穿きで村中を廻つて居る、そして、老人とは思えぬ程の熱烈な口調で、

「何としても、戦費を外國から借り度くない、若しさうなると、日本の國は闇だ、幾等強がつても外國からは「内兜」を見透かされるし、自然兵隊の勇氣も挫けるぞ、それにな、よしんば借り様と思つた處で、今度こそ外國では一文も貸さんぞ、金が無くては戦は出来まい、みんな揃つて貯蓄をして、國の現金を用意して置かねばならんと言ふのは、そこだ、全く身の爲國の爲に、嫌が應でも、貯蓄をしなければならん時季だ」

と言つて、間斷なく、村人を激勵して居るので、彼の統率する三十年會貯蓄組合は、もうとづくに、一村全戸の加入を見た、そして目下着々と貯蓄報國の實を擧げて居る。

筆者が、此の春、彼を訪れて、其の健闘を稱へると、彼は、豊に伸び行く我が村を見渡し乍ら莞爾として

「私は、今迄何一つ忠義を働かぬのが恥しい、せめて此の村の貯金を一錢でも多くして、非常時國家に盡したい」

と、語つた、其の顔には、然ゆるが如き愛國の赤誠が漲つて居た。

あゝ、八十四の老骨に、手作りの草鞋を穿ち、日夜とうとうと國の礎を踏み固める「草鞋長者」こそ、實に國の寶である。

二等當選

のし餅貯金

東京市中野區鷺ノ宮

山賀糸子

(一)

願以此功德 平等施一切  
同發菩提心 往生安樂國

冬の迫つてきたことが仕立物を縫ふ針の冷さにも感じられる、明治三十三年の晩秋。

谷底のやうな四谷區谷町の棟割長屋から、一心に正信偈を念誦する聲が、夜となく晝となく聞えてゐた、聲の主は、東京區裁判所麴町出張所の雇、小林芳次郎の妻ヒナ子であつた。

この夏まで、三十錢たらずの夫の日給に彼女の仕立賃を合せて、三つになる道枝の生長を楽しみに細々ながら暮してきたのに、七、八、九の三ヶ月、芳次郎が脚氣を患つて役所を休んでから

は日給は一錢も支給されず、醫藥と生活のためにわづかな道具も冬物も買拂つて、一家は困窮の底に投げこまれてしまつた。

そして十月、芳次郎がやつと、よれ／＼の袴をはいて出勤することが出来るやうになつたのを喜んだのも束の間、水のやうな冷い風の吹く日であつた。夫婦にとつてはたつた一つの慰めであり、希望であり、太陽であつた愛兒道枝を腦膜炎のために奪はれてしまつた。

お金さへあつたら、助からないまでも心ゆくばかり看護も手當もつくせたのに……息のあるうちに醫者にもかけられなかつた可哀な道枝よ！許しておくれ、お母さんを許して……。ヒナ子は愛兒の幻に胸をふるはせ涙ぐんでは正信偈を誦しつゞけるのであつた。

郷里博多に居た頃、萬行寺の恒順老師に歸依し深く淨土眞宗を信仰してゐた彼女は、たゞ一心に念唱する正信偈によつて愛別雜苦の悲みから、救はれてゐたのである。が、日毎に迫る年の瀬の經濟的な苦しみだけはどうすることも出来なかつた。

道枝が亡くなつた時、知人に用立てゝいたゞいたお金は返せるであらうか、米代は……家賃は……と思ふと暗い不安におそはれて、居ても立つてもゐられなかつた。

いたづらに悲しみ嘆いてゐる時ではない。もつと積極的に働いて収入を増し、病後の夫を助け

て生活の基礎を固めなければこの小林家は流離四散の悲運にあはう。働くのだ。働くのだ。悲嘆困苦の底から雄々しくも自ら勵まし鞭つて起ち上つた彼女は、仕立物より賃銀のいゝ足袋の内職をさがして、一時二時までも必死になつて貧しさと闘つた。

十二月三十一日が來た。

負債を返すと芳次郎の給料からは、家賃も拂へなかつた。春を迎へる仕度どころか、一枚の餅さへ買へないのだ。

何といふみじめな暮であらう、雨風をしのがせてもらつてゐるのに、家賃さへ拂へないのか……。

物堅い芳次郎の胸は朝から、縮木にかけられたやうに苦しかつた、ところが、その夜十一時過ぎまで夢中になつて針を運び、やうやく仕上つた足袋をとゞけながら、その月の賃銀をもらひに行つたヒナ子は、いつになく元氣な足どりで歸つてくると、

『只今ッ』

と聲をはずませたのである。

『おい、どうだつた？』

思はず聲をかけると、

「あなた、思つたよりたくさんいたゞけて……お家賃を拂つてこんなに残つたんです」  
彼女のひらいた手の中で、二十錢と五十錢の銀貨が二枚、五分芯のランプに照らされて光つてゐた。

白米一斗が一圓五錢で買へた頃である。その七十錢はおそらく今の四五圓、いやそれ以上だつたかも知れない。

「え、家賃を拂つてそんなに残つたのか、よかつた〜。ありがたう！」

あゝ、これで一錢のおひめもなく心ゆたかに、春を迎へることが出来るのだ。彼の心は急にゴムまりのやうにはすんできた。

「よし、お餅はおれが買つて來やう。お前はゆつくり休んでくれ。」

彼は二十錢銀貨をしつかり握ると、凍てついた大晦日の町に飛び出した。風はヒリ〜と頬に痛かつたが。銀貨を握つた掌はじつとりと汗ばんでゐた。

彼は夢中で市ヶ谷見付から九段へ走つた。

除夜の鐘が靜にひびいてきた、その鐘の音を聞きながら彼は九段下の夜店で一枚ののし餅を買

つた、その時の有難さ嬉しさ！

あゝ、やつと人なみにお雑煮が祝へるのだ。

これで道枝さへ生きてゐてくれたら、どんなに生甲斐があるか知れないのだ。道枝さへゐてくれたら……道枝さへ……。

と、その時、彼の脳裡に天啓のやうにある考へがひらめいたのであつた。

「……さうだ、道枝と思つて人の子を育てやう。失つた一人の子への愛情を百人、千人の子にそゝぐのだ。父母の熱愛を以て教育の聖壇に全身全霊を捧げるのだ。これほど尊い立派な仕事はどこにあらうか」

郷里で教鞭をとつてゐた妻もきつと双手をあげて賛成してくれるに違ひない。やらう！はじめは小さい塾でいゝ……。

最初電光のやうに閃いたこの無謀に近い考へは、次第に海原の波濤の如くにひた〜と彼の全身をひたし、極めて尊い宗教的感激のやうに彼の魂を揺り動かしたのであつた。

しかし、ヒナ子は彼が昂奮して語る計劃に對して彼よりも冷靜であり綿密であつた。そして彼女は次のやうな提案をした。

- (一) 初め一二年は生徒の月謝をあてにしないで、もやつて行けるやう先づ相當の貯金をすること、その實行方法として
  - (イ) この貧しさの中でさへのし餅を買ふことが出来たのである。これから先の毎月を十二月と思つて心をひきしめ、夜間働いた内職の賃銀をのし餅代として積立てる
  - (ロ) 間借をして家賃と間代の差額を積立てる
  - (二) 相當の貯蓄が出来るまでに學校經營の研究をすること
  - (三) 近くに同じ種類の私塾、學校がなく、しかもそれが要求されてゐるやうな土地を選ぶこと

もちろん芳次郎に異議のあらう筈はなかつた、彼は目的達成まで好きな煙草を廢して「のし餅貯金」に繰入れることを誓ひ、夫婦は希望に腫を輝かして芳次郎は三十三、ヒナ子は三十二の新春を迎へたのであつた。

松がとれると夫婦は知人の家の四疊半を借りて移つた、ヒナ子は少しでも冗費を省き收支を明かにするために家計簿を作つた。壁に碁盤目をひいた大きな紙を貼つた、その一駒々々をのし餅一枚に見立て、夕食後の内職の賃銀がのし餅一枚の代金になると一駒づゝ墨で塗りつぶしてい

つた、芳次郎の煙草錢も同じやうにしてのし餅代となつた。

一駒々々を塗りつぶすのが楽しみでならなかつた。一駒を塗りつぶす度に輝かしい希望に向つて一歩々々近づいてゐるのだ。能筆な芳次郎は、筆耕の仕事を探して役所から歸つても筆を離さなかつた。

二年たつた、貯金は元利百八十圓に達した。

(二)

明治三十六年の四月、芝、清正公坂の右側に「高輪淑女學校」といふさゝやかな三年制の學校がひらかれた。

尊皇奉佛の大義に依り、質實剛健を旨とし、女子の智徳體三育の向上發達を計り、眞の良妻賢母の養成を目的とするといふ、その學校からは、朝な夕な、緑ます檜葉の生垣をこえ、朗々と正信偈を讀誦する聲がもれ聞えて道行く人の足をとどめた。

小さな門をくゞつて飛石づだひに狭い玄關に入ると、左手の座敷に 天照皇大神宮がお祭りしてあつて、生徒は必ず、登校した時こゝに禮拜して八疊と六疊二間の襖を外した教室に入るこ

とになつてゐた。

校長は小林芳次郎、教頭は小林ヒナ子。先生はこの二人だけで、校長は教師であり事務員であり小使であり、教頭は裁縫手藝作法の先生であり女中でもあつた。

はじめ一人の生徒が入學した時、校長も教頭も、どんなにその一人を喜び迎へたであらうか、亡くなつた道枝が戻つてきたのだ。

教育の聖壇に身も心もさゝげつくす覺悟の二人は、たつた一人の生徒に燃えるやうな愛育の熱意をそゝいだ。

生徒は一學期に七人になつた。その月謝は家賃に足りなかつたが、夫婦にはのし餅貯金があつた。

夫婦は、ほのかな曉の光のたゞよひはじめる頃に起き出すと、校長は校舎の掃除をし、教頭は臺所で味噌をすつた。

かうして二三年たつうちに眞實と慈愛そのものゝやうなこの教育者の存在はやうやく附近の父兄に認められて芝はもちろん、品川、大崎、五反田あたりからも入學するものがあつて生徒は三十人、四十人とその數を増していつた。

机を作る、座敷を建増す、琴の先生を頼む、經濟的には少しも恵まれなかつたが、もうどんな苦しさも貧しさも笑顔を以て堪え忍ぶことが出来た。

ヒナ子は此間に、課外の生花を希望者に教へ、その月謝を夫から自分のものにするを許していたとき、夜の仕立物代と合せてのし餅貯金を怠らず、三年間に二百圓も蓄へると、それを土臺にして、三年満期五百圓の月掛貯金をはじめた。

五百圓が手に入ると、それに自分の収入を加へて三年満期千圓の貯金をかけはじめた。

千圓出来ると、それは据置きにして又三年五百圓の貯金をはじめてこれを繰かへした。

十八年たつた。

六十人近い生徒は狭い校舎に溢れて、新に裁縫の先生と小使の婆やが雇はれた。

その時、目黒の『兒童學園』といふ二三錢の入園料をとつて、子供に運動具を貸したり小動物を見せてゐたところが経営困難で賣物に出た。

夫婦は、三千圓近い貯金を投じてそこを買ひとりバラツクながらどうやら學校らしいものを建築することが出来た。

## (三)

目黒權之助坂下の兒童學園跡に移轉した高輪淑女學校が、頭山滿、高楠順次郎、富士川游の三氏を顧問とし、尊皇奉佛、質實剛健の校旗をかゝげ、昇格改稱して文部大臣認定日出高等女學校となつたのは大正十一年四月、淑女學校開校以來實に二十年目であつた。

日出高女はその名の如く輝かしい進展をつゞけ、校庭に造營された伊勢大廟遙拜殿にぬかづきつゝ登校する生徒の數は年毎に百人、百五十人と増していつた。

やさしき胸の奥深く

剛の一字を 秘めよかし

人の世なれば 乙女にも

剛健質實の校風を歌ふ幾百人のすこやかな教へ子の合唱の聲が、とう／＼として新潮の如くに、學園前面の樹立「御稜威の森」に、二千四百坪の校庭にひゞき渡る時、高く掲揚された國旗の下に朝の遙拜をする小林校長夫妻は、感謝に胸を迫らせて凝然として立ちつくすのが常であつた。

「かつては妻が働き得た二十錢銀貨を握つて九段下へ一枚ののし餅を買ひにいつたが……」そののし餅がどんなに有難かつたか、あの時の感激と喜びがこの學校を生んだのだ。校長はのし餅が彼に與へた喜びを忘れなかつた、そして、年の暮になると一片の餅さへも得られず正月を迎へなければならぬ氣の毒な人のことを思はないではゐられなかつた。

その人たちに一枚ののし餅でも供養してあげたらどんなに喜ばれることであらうか。彼は何でも思ひつくと、すぐそれを實行に移さずにはゐられなかつた。

さうだ、貧しい人々にのし餅を贈るために、小さな袋をさげて孤兒の養育費を集めやうと街頭に立つたベスタロッツチの如くに道行く人に淨財の喜捨を乞はう。

大正十三年の暮であつた、彼は先づ思ひ出多い九段坂に立つた。それから銀座通りに、百貨店の前に……。

一枚でも多く氣の毒な人達に餅を贈りたい熱意が砂塵を捲く、枯の街頭に、いつまでも彼を立たせ、叫ばせた。

まもなく、職員生徒の有志が校長を助けるために起つた、かうして暮の街頭は彼の教へ子の爲に、社會奉仕の精神を實地に訓練する教室となつたのである。



彼が投じたのし餅供養の石は小さかつたが、その波紋は大きかつた、大正十四年には佛教徒「餅の日會」が創立され、數千人の佛教主義女學校聯盟加盟校の生徒が街頭に立つて、毎年數萬枚ののし餅を贈ることが出来るやうになつた。

## (四)

日出高女の基礎が出来ると、その上に歐洲諸國の教育制度や設備を視察研究して、さらに完備した壯嚴な女子教育の殿堂を築き上げたい、といふ熱望が燃え上つて、停滞することを好まない小林校長の心は、遂かに波濤萬里を越えて、遠く歐洲の空に強く索かれてゐた。

そして、遂に機會が與へられた。昭和四年八月、ゼネバに萬國教育者大會が開かれることになつた。彼は直ちにその大會に出席する爲、主催者帝國教育會に手續をした。

同行者は彼の外に十五人の教育者。出發は六月三十日ときまつた。ところがその月半、ヒナ子夫人は突然鼻孔から出血してそのまゝ床についてしまつた。腎臓炎と診斷した主治醫は眉をひそめて入院をすゝめた。そして、芝櫻田巴町の長谷川病院に入院したが、結婚してから三十九年

夫を授けて苦闘をつゞけた彼女の肉體はもう、のびきつたゴムのやうに弾力を失つてゐた。

經過ははかなくしくなかつた。六月三十日が来たけれども彼女は起き上れなかつた。

晴れの鹿島立ちを前にして、校長は心を曇らせながら、妻のベットの枕もとに立つた。

「坐らせて……」

夫人は看護婦にいつて、やつと、だが膝を正して白いふとんに坐つた。そして、モーニングの夫の姿を見上げた。その端麗な氣品高い顔は紙のやうに白かつたが、眼は歡びの涙をうかべて輝いてゐた。

夫は、夫は世界の教育者の集りに出席出来るやうになつたのだ。

出發の時間が迫つてきた。

「ぢや、だいにして……行つてきますよ」

「……御無事で、どうぞ……」

二人はうるむ目を見合せた、そこには校長も教頭もなかつた、たゞ、あるものは長い生涯の朝なく一握の味噌をとかしてはすゝりあつた老ひたる夫婦の別れを惜しみ、互ひの健康をいたはりあふ眞實の愛情ばかりであつた。

萬國教育者大會に出席の十六人の教壇の戦士を送る東京驛のホームは見送りの群衆で渦をまいてゐた。

九時三十分、出發の時、教へ子の打振る日の丸の旗の紅白の波、わきかへる萬歳のどよめきの中で校長は、端然と病床に坐つて正信偈を唱へながら、夫の長途の旅の無事を祈る妻の姿を見、聲を聞いた。

## (五)

八月二日、ゼネバの大會を終へた小林校長は、

「十九世紀の哲學は、すべてカントを通らねばならぬと同じやうに教育者はすべてベスタロツチを通らねばならぬ」といはれてゐるベスタロツチの聖跡巡禮に出かけた。

エベルドンで、人類の母ベスタロツチ夫人アンナの墓前にひさまづいた時、しきりに病床の妻のことが思はれてならなかつた。

丁抹の教育者がアンナ夫人を評して、

「彼女は、彼女のみが持つ特別な優しさによつてベスタロツチの感情の昂奮を和げることを知

つてゐる、また妻らしい大らかな心でベスタロツチの癖や、物事に熱中することをためていつた

……』  
と言つてゐる。

この言葉は、そのまゝ妻ヒナ子に對しても言へないであらうか。

「……いつ浮ぶ瀬があるかわからない貧乏生活のどん底がついた時もアンナ夫人は少しも失望しなかつた、夫を勵まして家政に臺所に學校の事務に、裁縫編物の授業に休む間もなく働きとほした、そして、肉體と精神の過勞が、彼女から生命の泉をくみつくした。

……人のいゝベスタロツチを、どうぞいつまでも見すてずに下さいませやう……彼女はかう病床に書殘して神の國へ召されたのである。』

ヒナ子！ アンナ夫人にも劣らぬ辛酸勞苦に肉をそぎ骨を削つたヒナ子！

「私をして今日あらしめたのは、妻だヒナ子だ！」

小林校長は、アンナ夫人の墓前にぬかづいては病床の妻を思ひ、その恢復を祈りながら目頭を拭いて宿へ歸つた。

そこに、夫人危篤の電報が待つてゐた。

(六)

『御大事が迫つたとの急報をいただきまして着のみ着のみ、駆けつけました。』

妻の靈位の前に涙を澗らし暗然としてうなだれる校長に、ヒナ子夫人の臨終にかけつけた彼女の親しき友は語りつづけた。

『……奥様！私ですと申上げますと、うなづいておいでよしたすが、水を……とかすかに仰言たので、お水を吸呑みで差上げますと、いただきますと、お手を合せておのみになりました。』

安らかな校長は目をしばたいた。

『それから小林のことを、よろしく……と、そして、二度お念佛をお唱へになつて、眠るやうな御臨終でござりました。』

校長はふるふる唇をぎゅつとかみしめた。熱湯のやうな涙が老いた彼の頬に白く光つてとめどもなく流れ落ちた。

彼に……といつて、妻が遺した手提の中の包をひらくと、三冊の銀行の通帳と印鑑とが出てきた。通帳には総額一萬二千圓の預金が記入してあつた。

『いつのまに、どうしてこんなに貯金したのであらうか。』

その疑問を彼女の日記帳が解いてくれた。

ヒナ子夫人は、日出高女となつてから教頭として受ける俸給全額を貯金してゐたのである。その上、昔を忘れず家計をきりつめ校長から渡される生活費の割以上、屑屋に拂つた紙屑空堀代ものこらず積立てゝゐたのであつた。

日記の最後にその金を學園の設備充實のために使はれるやうに……と書いてあつた。

小林校長は涙を拭いた、そして亡き妻が不滅の法身とゝもに、日出高女の完成に向つて猛然として立ち上つたのである。

今、校長は年七十一、なほ壯者をしのぐ不退轉の勇猛心を振つて、四十餘人の教職員と二十學級一千餘人の教へ子を導き、教育報國の一路を邁進してゐる。

この日出學園の礎を築いたものこそ校長を扶けて實に三十九年、一貫してかはることなき小林ヒナ子先生の積極的な勤勞と節約貯蓄の大精神であつた。

雨、後晴れ

新潟縣柏崎町東榮町  
南 香 平

不幸なるスタート

明治二十九年、北國の陰惨な吹雪に暮れる山峽の貧農の次男に生れた私は、中學を卒業すると月給八圓の代用教員となつた。次いで獨學數年の後、國語の中等教員試験を通過し、大正八年二十四才でN市の中學教師となつた。月給は臨時手當を入れて八十五圓であつたので、大分餘裕もあり、父に月々二十圓を送金し、他に月掛二十五圓の三年掛積立金を、利子の高い郷里の信用組合に契約した。三年後の満期に千圓受取つたのが二十六歳、丁度T市の中學に轉任した時であつた。

處が中學時代の友人で、運動具屋をやつてゐる男が、千圓ないと破産するから是非助けて呉れと頼むので、千圓そつくり貸してやつたが、この男は約束の期限の來る前に、店を畳んで逃げて

しまひ、むざ／＼と千圓を倒されてしまつた。

大正十一年二十七歳で結婚した。當時の月収は年功加俸共で百十八圓であつた。私は十二圓の見苦しい借屋に入つた。妻は着物や身廻品は一切持参したし、私も今迄に必要なものは整へてゐたので、月々の経費は却つて結婚前程かゝらなかつた。

結婚後、妻と次の様な生活設計を樹てた。

- (一) 當分基礎月収百十八圓として、今後の増俸及賞與は全部貯金すること
- (二) 月々二十圓は父に送り、三十圓は貯金すること
- (三) 豫備費として十圓を控除し、これにて被服類及臨時の支出に充當すること
- (四) 右は子供の出生迄必ず勵行すること

私は再び、某貯蓄銀行に、三年掛月二十五圓四十錢、千圓受取の定期積金を始めた。他に四圓六十錢宛毎日郵便貯金をした。三年目に女の子が生れたが、その年に次の様な貯蓄が出来てほつとしたのであつた。

- 一、〇〇〇圓 定期積金満期拂戻
- 一七三圓 郵便貯金

二一〇圓 賞與積立銀行預金

計 一、三八三圓

私が貯金を勵行してゐるのが、同僚の間に評判となり「食ふものも食はず貯めてゐる」だの「守銭奴」だのと蔭口をするものもあつた。私はそれが取るに足らぬ言葉とは分つても、嫌な氣がした。それでも、千四百圓近くの金を貯へたと思ふと、流石に嬉しかつた。

しかし私は又も思はざる不幸の爲に、この金を投げ出さねばならなかつた。

その年の五月、父の家が失火で全焼してしまつたのであつた。もとより貧しくて、月々私の送金を足しにしてゐる父は、一厘の貯へもなかつた。私は妻に相談すると「千四百圓みんな上げてしまひませう」と云ふので持參したが、父は中々受取つてくれなかつた。半日がかりで説得して、無理に渡して來たが、私の生涯にこの時程、父の喜んだ顔を見た事がなかつた。父は金よりも何よりも、私の孝心が嬉しいと、老の眼にぼろ／＼涙を流して呉れたのであつた。父はその金で、さゝやかながら雨露を凌ぐ家を建てた。貯蓄といふものは意外な處で親孝行するものだ、熱々思つたのであつた。私は再び無一文になつた。

恐ろしき誘惑

彼是して居るうちに二十九の歳は暮れて、三十の聲をきき、長女は二つになつた。

實のところ、私は二度も貯蓄を失つたので、少し嫌氣がさして來た。も少しのんびり暮さうかと妻に云ふと、妻は教員の前途の細かい事等を説いて、氣をとり直して飽迄貯金をしてくれと云ふのであつた。私も先輩の教員で、自分の子の教育が出来ず借金して歩いてゐる人を見て、その痛々しさに目を反けた事もあるので、物質的に恵まれぬ教員の身の上をつく／＼考へて、再び新なる勇を鼓して、三度目のスタートを切つた。

大正十四年、三十歳で又も、五ヶ年の定期積金、月掛四十三圓八十錢の加入をした。當時の収入は二次加俸がついて百三十圓程であつた。何分、収入の三割強の貯金なので、一切の冗費を節して緊張しないと足を出す憂があつた。私共は常に現金主義をとり、先月分の給料でいつもその月の支拂をする様に計畫した。

昭和元年に長男が生れたので一時苦しくなつたが、その年の秋増俸して百四十五圓になつたから、之れで何うにか遺縁はついた。次いで昭和三年に次男が生れた。昭和四年には、待ちに待つ

た満期が来て、生れて始めて三千圓の現金を握つた。今度こそこの果實に幸あれ、不幸よ來るな！と早速之れを定期預金にでもしやうと叔父に相談したら、お前達には固い公債が一番よいと云ふので、額面三千圓、二千九百四十七圓で夫れを買つた。此他賞與金の積立てたのが二百圓近くあつた。だが、この分は私の兄が病身なので、見舞として全部送つて上げた。

貯蓄に關心を深くしてゐた私は、某雑誌で一萬圓貯金成功談と云ふのを讀んだ。それに依ると、サラリーマンは、月給の残りをこつ／＼貯めても、一生かゝつたつて何程にもならぬ急速に貯金するには、資金を最有利に運用せねばならぬ。私は株式投資で成功したが、致富の極致は株式に限る——と云ふのである。私もあんなに辛抱して、五年かゝつて三千圓では、將來一萬圓になるには十五年も、ともすれば二十年もかゝる。私も一つ株式投資でもしてみやうと考へてゐたのであつた。

其處へ待つてゐた様に知り合ひの株屋が、確實有利といふれ込みで、一株十圓の某鑛業株を買はぬかと勧めに來た。仰々しいパンフレットを持參して、この株は今こそ安いが必ず近い内に採鑛すれば、一割二分の配當をするから七十圓の價値はがあると宣傳するので、株屋のいふ通り、公債を賣つて、某株を三百株買つた。今に七十圓になれば二萬圓になる。持つてゐても大株主だ

と、一人喜んでゐた。

處が其ボロ株は、もと／＼反古同様なものであつたから、値の上る筈はなく、一時株屋の工作で十圓に煽つたもので、間もなく只の二十錢でも買手がないと分つた。その時ばかりはあまりの口惜しさに、その株券を筆筒から出して、皆な引裂いてしまつた。

妻は側で茫然として私の手をみてゐた。そして何んとも云へぬ悲痛な顔をしてゐたが、過去十年の勞苦を今更思出して、ほろ／＼と涙を流したのであつた。

思へば最初の千圓は友達に倒され、二度目は不慮の火災の爲に失ひ、今は自らの慾の爲に失つた。既に年は中年に達し、三人の子は日増しに父の負擔を求めて來てゐる。煙草も吸はず酒も吞まず、洋服も作らず、妻に一枚の晴衣も買つて與へず、ひたすらに貯へて残されたものは、この悲しき絶望のみであるとは！

もう貯蓄なんかするものか。私には金が授からぬやうに出來てゐるのだ。之からは、伸んびりと暮らしてやる。まるで自分達は、世の悪魔の爲に貯金して來たやうなものだ。

私はその頃から茶屋酒を飲み出した。だらしない生活はこの三十四歳の秋に始まつた。飲む酒は苦く、家の中は暗かつた。

深夜に眠る兒どもの顔

その夜は、街燈が秋の雨に滲む、淋しさに氣の滅入るやうな静けさに沈んでゐた。

酒を呑んで歸つたのは、もう一時だといふのに、妻は一心に、暗い電燈の下で、古い羽織を仕立て直してゐた。その羽織は、妻が何年間もの永い間着古して、袖口も破れた時代遅れのものであつた。思へば、結婚以來、もう十年にもならうと云ふのに、何一つ買つて喜ばしてやれなかつた妻の姿がいぢらしく、私は濟まない心で、ちつと其の羽織を視てゐた。

側に三人の子供が、天真な無邪氣な顔で、何も彼も父に任せ切つた安らかさのもとに、すやすやと眠つて居た。この從順にして眞摯なる妻の姿と、この天真なる愛兒の寝顔とは、何んこの醜き父の胸を強く打つた事であらう。

「あゝ、妻よ、子供よ、許してくれ。明日は父の立直る日だ」と心に強く叫んだのであつた。

翌日から私は三度、我志を立て直した。禁酒を誓ひ、克己の生活へ突進して往つた。

十月の末から妻が病氣で臥床した。女中を探したが見當らぬし、妻は大した苦しみもないから

このまゝで何うにか過したいと熱心に言ふので、妻の分も私が働らくことにして往つた。一面には、折角始めた、四度目の貯蓄計畫が挫折するのを、妻は此上もなく心配したのであつた。貯蓄の方法は、前回と同じく、三年満期の三千圓、月掛四十三圓八十錢のものであつた。當時の月収百四十五圓からこの月掛を差引くと百圓残るが、之れで五人の生活を支へて行くのであるから女中なんか置いては豫定の貯金は放棄するより他なかつた。妻の病氣は神經衰弱だと醫師は云つた。動くとも右側の頭が痛む病氣であつた。私は朝早く起きて、炊事も洗濯も掃除もした。その上、妻と子の爲に、晝食の用意をして勤めに出るのであつた。家庭の私事の爲に、少しでも公務を妨げてはと、學校の仕事は従前に劣らず熱心にやつた。

しかし、幸な事には、約六十日の静養で、妻はすつかり健康になつた。

隣家の警官

年は明けて私も三十五歳を迎へた。この年は幸に一家健康で、人並の交際は缺かさず、さう無理もなく豫定のコースを進んだ。處が弱つたのは昭和六年の減俸令で、本俸と加俸合せて約十圓を減らされて、それだけ節約せねばならなくなつた。しかし定期積金を減らす譯にはゆかぬ

ので、家計を切りつめることにした。そして百圓の家計費を九十圓にすることにした。

昭和八年に三男が生れた上に、物價がそろ／＼上つて來たので、家計が愈々苦しくなつて來た。子供が時々醫者にかゝるので、之れに一番困つた。或時は、貯金の減額をしやうかと思つた事もあつたが、その度、私の心を勵ましてくれたのは、隣家の警官Y氏であつた。Y氏は月收六十圓で、子供二人を中學に出して、十圓の家に住み、格別みぢめな暮しとも見えぬ。それを思ふ時私が九十圓で暮せぬとは勿體ない話だと思つたのであつた。

昭和九年再び私は三千圓を受取つた。そして再び公債を買つた。積立てる積りの毎年の賞與は大部分父へ送り、一部だけ被服費に流用した。私も來年は四十であると思ふと、少し情ない様な氣もしたが、之から第二次の貯蓄を計畫した。長女と長男はもう小學校へ通つてゐる。五十迄に一萬圓にしやうと念願を樹てたのである。

### 私の日々豫算主義

平凡な事だが、貯蓄の要は、その日その日の支出を合理化するより他にないことを、今迄の経験で知つた。私は先づ人間は一體最低何程の生活費で生きてゆかれるかを研究してみたが、假

に五人家族ならば一人當り月十圓あるとよいと云ふ結論を得た。勿論最低と云つても、支那人の一部の様に、一日五錢なんて生き方もあらうが、私の云ふのは、日本に生活して、健康を保持し、何うにか社會的の生活の出來る程度を標準としたのである。そこで、いざと云ふ時はこの程度迄生活を切りつめる覺悟が出來たのである。

従來、いろ／＼と家計に關する參考書を読んで見たが、何れも一ヶ月の收支豫算を立て、食費が何程被服費が何程とやつてゐる。三十日の永い間の事だから、いくら豫算を立てても、つい忘れたり、費目別の集計がはつきりしなかつたりして超過し勝ちである。そして月末に悲嘆してゐる。さうかと云つて、各費目別に毎日の支出を振分けて記帳するなんて、忙しい家庭に於て、實際問題として不可能である。假に可能としても、月初の豫算通りにゆくのは珍らしい位だ。それに月豫算の缺點は、兎角掛買になり易く、自然支出が膨脹し勝ちである。そこで私は、以前から月豫算を日々豫算に改めて實行し、大變に好結果を得た。今私の實際を一例によつて示すと次の様にするのである。

(昭和九年の實例)

夫婦、十一歳、九歳、七歳、二歳の四子六人家族

月收 百五十圓



内月掛貯金控除額 四十七圓

甲差引 殘 百〇三圓

月末確定支拂の分 (節約の餘地なき費目)

米代	十六圓	家賃	十二圓
電燈	一圓八十錢	公課	二圓
新聞、雜誌	二圓	保險	三圓
學校、諸費	三圓二十錢	豫備	五圓

乙計 四十五圓

甲より乙差引殘 五十八圓也

先づ月給日に、貯蓄銀行の集金人が来るから、四十七圓支拂ふ。次に乙の分四十五圓は直ちに小口當座に預金して、月末支拂に引當とする。残り五十八圓の現金で、前記米代等の費目外の毎日の支出を賄ふ。五十八圓を三十日分の日割にして、一日一圓九十錢、之れを、毎朝、妻は支拂用の財布に入れておく。先づ月の一日に財布に一圓九十錢入れる。二日の朝、一日の残りが五十錢あると、それに一圓九十錢加へて二圓四十錢とする。如何なる場合でも財布の中に在る分を超

過して支出しないのが鐵則であるから、今假に五圓の反物を買ひ度いとしても、財布に五圓たまる迄は買へない。そこで毎日五十錢なり六十錢なり節約して十日目に五圓の餘裕が出た時に現金で買ふのである。豫備費は病氣とか緊急の場合の他は手をつけぬ。忘れてならぬのは、決して其日不足でも翌日の分を廻してはならぬ事である。さうすると直ぐにこの方法は亂れてしまふ。さて、今日は一つ鯛を買ひたいと財布をみる。その日の財布は殘金三十錢しかないとする、鯛は見合せて有りあはせの鹽引で我慢する。その代り四五日の節儉で餘裕が出来た時には鯛も買ふ。だから、時々何んにも買へぬ日が月の内に二日や三日出来る。一厘の支出がなくとも、家にはあり米はあり光はありお菜の買置位あれば、充分やつてゆける。主人の小使もこの一圓九十錢から必要だけ渡す。例へば急に宴會があつて二圓必要だが、その日の財布に一圓五十錢しかないとする。その五十錢の不足は、萬己むを得ざる例外として、翌日分から五十錢前借する。その代り翌日分は五十錢引いて、財布には一圓四十錢しか入れぬ。要するに、この方法では、一日一日の豫算を固く實行するにある。こうすると、一日の支出の目標がはつきりして、妻は實に經理し易いと喜ぶし、小さい家計でも自然と興味が湧き、家事の切り盛りをも工夫して、月末には五圓位の剩餘を出して、私を驚かせ、之れで小旅行位させてくれる月もあつた。その上に生活が規律

的になり冗費は、徹底的に節減されて来る。即ち家計の自動調節化とでも云ふ様なことにならう。この方法は何年か継続してゐるし、人にも勧めて、大分喜んで下さつた方も多いのであつた。

### 七千圓貯蓄を達成

私ももう四十三歳であるが、今年の暮れには次の様な財産目録を作る事が確實となつた。

- 三、〇〇〇圓 四分利公債額面(時價一〇三圓位)
- 三、〇〇〇圓 本年十一月満期定期積金
- 七二〇圓 公債利子其他積立郵便貯金

計 六、七二〇圓

他に年掛三十六圓の保険料を貯蓄と見れば、之の拂込額合計約三百圓、總計七千圓の貯蓄が出來た譯である。之れから多少の増俸はあるとしても、子供の教育費も激増するので、從來の様に貯蓄も出來ぬが、五十歳迄には、充分一萬圓に出來ると思はれる。

私は貯蓄に志して三度躓いたので、思ふ様に貯蓄の額が上らなかつたが、順調だつたら勿論一萬圓は突破してゐたのであつた。

他の人の貯蓄談を讀むと、収入の半分も貯蓄した者、三十歳で一萬圓に利殖した者等、全く驚異すべき人もあるが、私にはそんな事は出來なかつた。只、スロー、バツト、ステツディで、自分の地位をも顧み、あまり極端な事は採らず、こつ／＼と氣長に、平凡な定期積金を用ひて來たが、まだるい様でもこの方法が私には却つてよかつた。焦ると昔の様にボロ株等掴んで失敗するのである。

### 私の生活準則

賞與が年一回で、しかも月給の六割といふ程度の教員生活では、何うしても月給の節約より他に方法はないので、勢ひ人並の生活をしてゐたのでは、月に十圓の貯金でも不可能である。そこで私は生活の合理化を爲に次の「生活準則」を作り實行した。

(一) 虚榮心を捨て、正しきを踐み、感恩奉謝の生活を營むこと  
貯金には道德的な意識が何より大切である。夫婦喧嘩等すると直ぐ家計に悪影響を與へる。感恩の念あれば不平は起らぬ。虚榮心の爲に費す金は世にどれ程多いか分らぬ。

(二) 世間の義理を缺かぬこと

公共的な寄附を惜しまず、人並の交際はせねばならぬ。守銭奴となつたりしてはならぬ

(三) 禁酒禁煙

(四) 間食を節減し、保健に留意する事

(五) 金銭のみならず物を大切にすること

金を大切にすることは多いが、物を大切にすることは少ない。家庭の廢物で殆んど利用出来ぬものはない事が分つた。例へば、私達は、下水に流す残滓や魚の腸でも之を肥料として蔬菜に用ひるし、汚い紙屑でも燃料に出来る。況して其他のどれ一つとして利用出来ぬものはない。それから品物を大切に取扱ひ、之を破損せぬことが肝要である。

(六) 被服を簡易化すること

被服費が家計の二割もかゝるのが一般であるが、之は大英斷で七分位に出来る。洋服を夏冬の二着に限り下着で調節するとか、手製の蝶ネクタイを用ひるとか、婦人の着物を簡易化するとか方法はいくらかもあるが、要は實行するかしないかにあるのみだ。

(七) 無益の贈答を廢止すること

(八) 子供に節約の訓練を興へる事

(九) 徒歩主義、手辨當主義を實行する事

(十) 器具を最小限度に留める事

茶籠笥だの洋服籠笥だの、火鉢だの、本箱だの、机だの、椅子だの、實に家庭には多くの家具が備へられてゐるが、之を最小限度に制限する事が非常に家計に利益すると共に、日常の掃除整理、修理等を簡易にして主婦の能率を向上させるに役立つ。

過ぎ去し彼方を顧みて

嘗て私が貯蓄に精出してゐる頃、土地の新聞に散々私の悪口をゴシツプ的に皮肉られたことがあつた。又、同僚間の義理は缺いた事は一回も無かつたが、兎角、金でも貯めると嫉視されるもので、時々皮肉を浴びせたり、甚しいのは、生徒に迄「あの先生は守銭奴だ」と宣傳した人すらあつた。私もそんな時は、實に嫌な氣持がしたが、貯蓄は利己的なものでなく、實に國民的なものであり、報國的なものであるとの信念のもとに、堂々と實行して來た。

私の一番愉快に感じたのは、この事變に際して、同僚中、自分が一番多くの献金が出来た事であつた。私に蔭で悪口を云つた人よりも遙に多くの金を國に捧げ得た事であつた。そして又

生徒に向つて、『勤儉貯蓄』を訓話する資格も何うにか出来た事であつた。

### 三等當選

一萬圓貯蓄を完成し

療養しつゝ、更に一萬圓

東京府武藏野町吉祥寺

岩 瀬 又 吉

はしがき

働いて収入を多くし、節約して支出を少なくすれば貯蓄は知らず／＼に出来やう、それには當

然健康であらねばならぬ。然るに私の場合は、業病結核に倒れて療養すること茲に十五年、あらゆる苦難と闘ひながら既に初めの目標たる一萬圓貯蓄を完成、是を活用して先づ生活の安定を計り、更に進んで一萬圓を目指して貯蓄すべく、今やその楽しい途上にあるのだ。

斯うした生活の安定は自然環境を良くし、常に精神をす／＼しいものにして、病は次第に良い経過をたどり、いま恢復の恵まれた身をベランダに憩ひ、超えて來た道を、願て感慨無量なるものがあるので、私はつく／＼思ふのである。

——この長期闘病の私でさへ、心がけ一ツでこのやうに貯蓄が出来のだから、健康な人々にあつては、その出来るのが當然であり、若し出来ぬとすれば、それはその人の心がけがわるいのだ、と。

袂に五錢玉一ツ

あゝ金さへあれば!!

斯う童心深く刻みこまれたのは私が十歳の時であつた。家が貧しく、僅か五百圓の借金の爲めに離散して尋常小學を中退した私は、給金を前借して菓子屋の小僧を振出しに、洋傘屋、油

屋、活版所と三州岡崎から横濱へと流轉、それから新聞や牛乳配達の傍ら苦學するに及んで益々金の尊さを痛感した。

苦學は報みられて十八歳の春横濱市長者町郵便局の通信事務員に採用された。日給二十二銭に隔日の徹夜料十銭、月収約八圓であるが明治三十三年頃は物價が安くて下宿料も六圓位だったから何うやら獨りの生活は出来た。併し生活にゆとりといふのがないので、私は荒物屋の二階三疊を同僚三人で借り（月三圓、一人一圓の割前）一食四銭の辨當を食ひ人の徹夜を引受けたり、時々荒物屋のお手傳ひをして僅かながら収入を多く支出を少なくしてその剩餘を貯蓄した。金といふものは持つてゐるとツイ費したくなるので私は五銭の白銅一ツきり袂に入れず外出したものが、當時はこれでお汁粉が二杯、壽司も天井も食へ、安芝居も觀られた。若し使はぬときは使つたものとして貯金玉に入れた。此のお蔭で勉學に要する費用にさしつかへた事なく、早稻田専門學校（今の早稲田大學）の講義録、夜學の授業料、教科書類も滞りなく求められた。二年の後には五十圓近い貯蓄が出来たが、抑も私が初めて貯蓄したのは此の郵便局に勤めた月で、一圓五十銭を天引して辨天通りのある貯蓄銀行へ預けた。新しい通帳に記入された一圓五十銭、私は幾度も見直して胸のときめきを感じたことを今もよく覚えてゐる。此の通帳を

私の恩人野原正助氏に見せたとき、氏は大層喜び古歌をよんで私を勵まされた。

なせば成るなさねば成らぬ何事も

成らぬは人のなさねなりけり

### 妻の内職で生活費

「これからの世の中は書よりも文章だ」

野原氏の教訓に従つて、私は習字を中止して文學にいそしんだ。投稿が縁となつて横須賀軍港の新聞記者となり、それより東京に出て政友會の機關紙中央新聞、徳富蘇峰先生の主宰せる國民新聞を経て東京日日新聞に轉じた。競争の烈しい社會部記者、そして生活が不規律で放肆に流れ易い社會部記者だ。私は地位の昇ると共に健康を害しつゝ、相當の道樂者になつたが、苦勞を重ねたお蔭で縮るところは縮り、自制して破目を外すやうなことはしなかつた。これには妻の心がけが大に與つて力がある。

結婚した當時から、妻は私の蒼白く瘦せた體常にゴホン／＼咳をするのを心細がつて前途を憂ひてゐた。ひよつとすると肺病じやないかしら、と思つて。

子供が出来てからの妻は、徒らな憂慮から萬一の備へに移り、將來の生活安定を圖るべく決意した。それは中央新聞時代からで、私の外交費の幾分かをそつと貯へる外、自轉車の部分品（皮のハンドル縫付）、足袋底刺し、子供の帽子加工等の内職をして之を生活費に當て、私の月給からも出来る限り貯蓄に廻した。私は妻に勝くられることをよく知り、交際にも事缺く場合もあつたが妻の心がけを、よく知つてゐたので内心天引貯金をさせられる氣持でゐた、従つて茶屋酒を飲む分は餘計働くといふ風になり、成績は擧つて幹部の受けはよく収入も多くなつて貯蓄は月々年々殖えてゆく。

東京日日に轉じた頃は歐洲大戰中で、物價高につれて新聞社の手當もよくなつた。月四圓五十錢で借りてゐた淀橋區角筈の佗しい家は既に大戰直前に貯金の中から百九十五圓で買つたので、同僚が家賃の暴騰に悲鳴をあげてゐるのを尻目に、一文いらすの自分の家に悠々と住み、同僚の多くは虚榮から相變らず女中を置いて収入よりも、支出の多い暮しをしてゐたが、妻はひとりで立働きのながら内職を續けてゐた。

額面五百圓の公債を二枚買ったとき、父は私達夫婦を樂しさうに眺めながら言ふのだつた。

「人間一生に一度は波に乗る時がある、お前達は今その潮時だから此の機を逸しないやうに」

### 公債で二重の利子

戦争景氣につれて内職の工賃も割よくなつた。妻は夜もおそくまでセツ／＼と働き、私は終電車で歸つても自轉車の皮サツクが茶の間の四疊半に山と積まれて、皮の縫付に忙しがつてゐた。

「おれが餘計働くから、夜は早く寝たら」

といふと、晝間は人が来て落ついて仕事が出来ぬと云ひ、それに内職に依る金の尊さは内職する者でなくてはわからぬと益々勵むのだつた、交際とは言へ、女を侍らして酒を飲むとき、私は不圖この妻の内職せる姿を思ひ出して、同僚のとめるのを振切つて歸宅することも度々であつた。

歐洲大戰が漸く下火となつたころ、私の貯蓄は五千圓を突破した。郵便局と銀行の預金から五百圓づゝ出して更に公債を二枚買ひ、前の分と合せて二千圓の公債を所有するに至り、これを確實なる建築請負業者の保證金に代用してやつて年八分の利子を受け、それに公債の利子を加へて年一割三分といふ好利廻りになつた。此の利子で勸業債券を買入れ、その債券の利子を貯へて更に債券を買ふやうにして債券は債券を産むのであつた。その頃は屑物類の値が上つたが、妻

は矢鱈に賣拂はず出来得るだけ此の廢物を利用して間に合はせ、新聞雜誌とか空瓶空樽のやうな利用出来ぬものに限つて賣り、その金を別に貯へて置いて、盆暮に要する費用に當てたが、これは今でも續けてゐる。

- 一、金は金を愛する者に慕ひ寄る。
- 一、金は金を産む。

この言葉を本當に味つたのは、此の時分からであつた。

### 肺病を宣告されて

生活に何の屈托もなく、前途を樂しみに面白く働けばこそ優遇される。私は一介の平社員でありながら昇給に昇給して月給百五十圓となり、毎半期の賞與の如きも月給の約七ヶ月分即ち半期千圓餘といふ破格の賞與を貰ひ、すべての待遇も之に準じてよくされた。賞與はそのまゝ手付けず丸の内の銀行へ、また月給の中から百圓づゝ之も銀行へ、其他収入のあつた分は郵便局へ預ける事にしてゐた。それでは生活費を何うするかと云へば、月給の残り五十圓と妻の内職約三十圓で充分であり、衣類も娯樂費（節約してゐるから費用は少ない）もその中から支辨され、住

居費は前に言ふ通り自分の所有であるから僅かの地代（月一圓二十錢）と、税金だけで事が済んだ。私の交際費は要るだけ自分が餘分に稼ぎ、その稼が足らぬ場合は交際グループから離れてゐた。

斯うして貯蓄は苦もなく殖えてゆき、金は金を産んで、吾等夫婦と父と、子供と四人暮しの一家は春風駘蕩たるものであつたが、満つれば何とやら、私の體の變調から曇ひの雲がかゝつて秋風落莫を感じるに至つた、といふのは思つても忌はしい肺病の宣告を受けたからで、尤も事茲に至るまで烈しい咳と時々熱感、食慾不進に伴つて段々瘦せて行く自分を靜觀して一抹の不安を感じ、妻もそれを氣にしながら、元氣にまかせて第一線に活躍を續けてゐたのだから、斯うした不安も慢性的に忘れ勝て過して來たのだつた。ところが親しい醫師から當時にあつては誇とせるレントゲン科開設の披露に招かれたとき試みに診察して貰つた結果、既に完全な肺結核患者であることを宣告された次第だ。時に大正九年の六月、折から夏の臨時議會中であつたので、それが閉會すると間もなく相州久里濱海岸に轉地したが、私の肺病は餘程良性と見へて別に療養らしい療養もせず、普通の避暑客同様の生活をしてゐて僅か二ヶ月の後にすべての症狀が消失した。醫師もその経過の良いのに驚き、この分なら注意して勤めてもよからうと言つた。

……何んだ、肺病なんて、斯んなに易く癒るものなのか。

さう見くびつたのが悪るかつた、初めこそ萬事に注意して神妙な生活態度であつたが、何時とはなしに逆戻りして咳や痰を反覆するやうになつた。併し私は大して悲願もせず「二十年もこんな調子で元氣よく働き續けて来たのだから、療養は退職の後の事にして此の際出来るだけ多く金を貯めやう、それが結局勝利だから」と、覺悟して、社會部より収入の點に割のよい通信部に轉じて各地出張の旅を續けた。

### 切詰て長期療養へ

だが、とうとう来るべき時は来た、大正十三年五月一日の夜、私の蝕まれた胸は爆發して、東京日日新聞社編輯局の便所の中で息づまる程の大咯血をした。

肺病なるものゝ本態をよく見透して、茲に血みどろの闘病は始まり、體驗から来た心機の一轉から、これまで貯へた金を費さず更に進んで療養しながら貯蓄する決心をしたのは翌十四年の五月、即ち大咯血の洗禮を受けてより滿一ケ年の後であつた。此の間の消息は問題以外であるから省くが、要するに入院、轉地、其他いろ／＼手を盡したけれど、その経過は徒らに金を費して、

而も病は良くも悪くもならず、所詮は經濟力を充實させて長期療養の外はないと見極めたのだつた。そこでいろ／＼考へた末、醫藥の頼りにならぬ事を知つたから、休職期間が、尙ほ一ケ年あるのを幸ひ、月々の手當七十五圓(俸給の半額)を生活費に當て、向ふ一ケ年間を金のいらぬ清淨な空氣と日光に親しみ、安くて滋養に富むものを攝り、心身の安靜を守るといふ所謂自然療法を行ひ、その経過を見て第二段の策を講ずることに決めた。

ところが何うだらう、僅か數ヶ月の後には頑強な咳が著しく緩和され、喀痰が激減して而も執拗に反覆せる血痰が止まつた、體溫は無熱に近く、食の進むにつれて肉づきがよくなり、ふくらみをもつて来た、顔の色が赭く脂ぎつて来た。夏が去り秋を迎へてからは順風滿帆の好調で附近の散歩から、次第に延長して中央沿線に住む友達を歴訪するやうになつた。

その後七千圓を突破した私の貯蓄は、この病氣の爲めに挫折して而も二千五百圓程消費したが、淀橋から此の閑靜な、武藏野町に移つてから新宿の目覺しい發展につれて淀橋の私の家は千五百圓(百九十五圓で買つたもの)で賣れ、それに退職手當約二千圓貰つたので茲に消費した分を埋めて貯蓄は合計約八千圓となつた。これが是から私の一家を支へる柱である。



## 貸家建築、山羊飼育

六〇

長期の自然療法を徹底的にやるのには、先づその備へをといふ立前から、私は附近に適當な敷地を借りて療養小住宅を建てた、この試みは療養所に居ると同様の効果をあげ、且つ高い家賃から脱れるといふ一石二鳥のねらひであつた。

経過の益々良いのに勢ひを得て、次ぎ／＼と貸家を三軒建てたが、空気の流通と日當りのいゝ衛生本位の小住宅は人氣に投じて建てる片ツ端からふさがり、而も割合ひよく貸せて約二割の利廻りになつた、即ち三軒の家賃八十五圓、その中から地代、税金、火災保険等月割二十圓を差引いて實收六十五圓である。併し貸家は空く時もあり、年を経るに従つて修理を要するなど固定収入とは申せぬので、他に収入を圖る一方更に節約致さねば、相當の貯蓄は出来ぬ、そこで考へたのが山羊の飼育、養鶏、野菜作り、果ては肺病恢復の途上にある者の面倒を見る所謂療養下宿をまでやるやうになつた。勿論妻が主となつての仕事である。

山羊の飼育と云ひ、養鶏といふも極めて小規模のものであるが、乳と玉子代で日常生活費を補ひ、年一二回産まれる仔山羊の賣代金を賞與と見込む楽しみもある、私の攝取する滋養の自給

自足、これが又大きい。

……養鶏は兎に角、山羊が素人で飼へるかしら。

さう思ふ人もあらうが、私の経験では是れ程飼ひよく割のよい副業はないと信する、殊に郊外、農山村に於ては猶更である。餌に世話がなく草原に放つて置いてもよく、その場所の無い所ではお勝手のおあまりと時々豆腐粕をやれば大御馳走である、極めて頑健な動物で暑さ寒さに強く、先年の夏、雌雄二頭を豚運びの古籠に入れて遠く山口縣萩市に送り、また冬に樺太豊原に之も二頭送つたが少しも弱らなかつた。乳の搾取量は種類によつて違ふが私の飼つた駄物でも出盛りには一日一升も出した、羊乳は牛乳の二倍も滋養分があるといふので一合十錢で飛ぶやうに賣れ、年一回、又は、二回産れる仔山羊は牝一頭（生後三ヶ月位）十五圓から二十圓位で賣れた。療養下宿をするやうになつてから手が廻り兼ねたので山羊も鶏も中止してゐるが、此の山羊の爲めに何れほど家計を助け、貯金を殖した事か。

稼ぐに追つく貧乏なし、全くその通りだ。

斯うして、三年と経ち、五年と過ぎる中に不動産に投資した額と現金を合せて一萬圓に達したのは昭和五年の夏であつた。丁度その頃自宅と隣りの貸家の敷地百八十坪を地主の賣込によつて

格安で手に入れ、娘の良縁が定まるなど幸運と慶事が続いた。

翌年の正月、娘が結婚して婿と共にその勤先なる大連市に行つてからは吾等夫婦二人きりとなつた。いふのを忘れたが父は既に六年前七十二歳の高齡で病死したのであつた。此の目出度い正月を期して第二回の一萬圓貯蓄を決意し、尙ほ別れてゐても家族四人何れも最高額の簡易生命保険に加入した、毎月の掛金は年齢と拂込期間によつて違ふが、いまその保険金額と保険料を記すと、

	保険金額	保険料(毎月)
私の分	四百五十圓	四圓五十錢
妻の分	四百五十圓	四圓五十錢
婿の分	四百四十圓	二圓七十錢
娘の分	四百二十圓	三圓
合計	一千七百六十圓也	十四圓七十錢

で既に七年六ヶ月(昭和十三年六月迄)拂込み、あと二年半で私と妻の分(十年掛の養老保険)が満期になる。ところで私は掛金を一年分前拂してゐるが、斯うすると一ヶ月分割引かれ

て即ち一ヶ年分百七十六圓四十錢支拂ふべきを百六十一圓七十錢で済むのだから低金利の今日大層割のいゝ金利となる。

此種小額の保険は死んだ時の用意、即ち葬式費といふ事になるが、私は今のところ死後を目標とせず、生存中の強制貯蓄と心得てゐる、そして満期支拂を受けた時は此の分に限り獨立せしめて何か有意義に使用する考へである。

掛金と云へば、私は納税組合に加入して毎月五圓づゝ掛けてゐるが、これは納税義務を滞りなく苦もなく果し得て、而も年末に割戻しが来るので之を餅搗料に當てゐる。斯のやうに同じ支拂ふにも前者は纏めて利益あり、後者は然らずして利益があるのである。

### 買物は斯うして

日常生活の必需品買入方に就いては昔から妻の苦心するところ、殊に西郊に移つて物價が區々であり、事變下の今日においては其の買入方に、無駄のないやう、安くて良いものと熟慮研究して支出の少ないやうにやつてゐる。いま二三の例を挙げると、夏の暑い最中に炭屋がごねつてゐるのを見込んで、冬中使用する木炭や煉炭を安く仕入れ、また呉服雜貨類なども夏ものは盆過

ぎ、冬物はほかついた時分に百貨店めぐりをして所謂掘出しものを求める。此頃では百貨店に卸す間屋筋に向いてハンパ物を漁つて来るが普通市價の半額以下で買へる。食糧品の如き同じ中央沿線でも、吉祥寺、荻窪、阿佐ヶ谷、中野と所變れば値も變るから常にその幅を研究して電車賃を加算した上割安に買つて来るが併し如何に安いからとて不必要なものを買ひためるが如きは不經濟だから此點は注意してゐる、滋養物を必要とする私だから食物には關心をもつけれど要はその實質にあるのだから例へば鯛よりも新鮮な鰯、牛肉のロースよりも、コマ切、鰻よりも鰯の蒲焼、魚類の天麩羅よりも芋、蓮、人參、午夢等根類や豆類の精進揚といふやうに、安くて美味くて而も滋養に富むものを攝取する。

斯うして、すべて物を買ふのにも決して借りることをせず、一切現金主義で足をおしますに格安ものを買ひ漁つて来るから私の家へはどの御用聞も諦めてもう久しいこと一人も來ない。

### 貯金は身の爲國の爲

貯蓄は年一年と殖えて行く、昭和六年の正月、第二の一萬圓貯蓄を決意してから毎月五十圓を缺さず預ける。サラリーから離れて、長く療養生生活をするものが何うしてそんなに貯るかと思ふ

人もあらうが、既に述べた通りの吾等夫婦の行ひであり、而も今や生活の基礎全く成つて、夫婦のみの生活費は妻の副業の収入で充分、家賃は丸残りだから月々五十圓の貯金は當然である。

預金通帳のページが残り少なくなつた昨十二年の夏、自宅の隣地約二百二十坪が賣物に出たので格安の坪當り十五圓で手に入れ、既に買つてある百八十坪を合せ四百坪といふ纏つた土地が完全に自分の所有となつた。

私の肺病は既に停止状態となり、其後に併發した、腰椎カリエスも矢張り自然の力と精神力によつて癒つた、それにつけてもしみ／＼思ふのは貯蓄の有難さである。

……正しい肺病の療養は、精神を強くもつて清淨な空氣中に静臥することだ。

これはもう療養の常識であり、その心得あるものは斯うした態度で療養に精進するのであるが、多くの患者はその途中經濟力に破綻を來して、止むに止まれぬ無理と、精神上の打撃から悲しい轉歸を見るのである。私が重い肺病を、また業病カリエスを征服して今日在るは全くこの貯蓄によつて生活上何の憂ひもなく、落ついた心で靜かに長く臥てゐられたからだ、まことに貯金のお蔭で死病を癒し、老後の生活の安定を得たのである。

事變による物價高の今日、貯蓄難をいふものもあらうが、斯うした時節なればこそ却つて貯蓄

は出来るのである。銃後の緊張した心から産まれるもの、それは身の爲め國の爲めの貯蓄でなく、何であらう、吾等は益々奮つて貯蓄報國に邁進しやう。

### 三等當選

#### 半世紀の精進

富山市荒町  
青木周三

#### (一)

明治二十六年一月二十六日、空が蒼く澄んで、北陸の冬には珍しい位快く晴れた日であつた。此の日、富山市蛭町の一角に、貯蓄銀行の、華やかな店開が行はれた。開店披露の廣告も戸毎に配られた。粗末な印刷ではあつたが、蜜蜂や蟻が、冬に備へて、夏の炎天に營々と食物の貯蓄

を心掛けて働いてゐる圖案で、當時にあつては、かなり新味のあるものであつた。貯蓄の必要を懇々と平易に説明した文言が添へられてあつた事は言ふまでもない。

午前八時、この新しい時代に適はしい庶民の貯蓄機關が徐ろに運轉を開始したのである。

意外にも壁頭に訪れた預金者は未だうら若い夫人であつた。色白な面立のよく引き締つたいかにも働き者らしいこの婦人が、慇懃な態度で、預金掛に金一圓を差出し、眞新しい普通貯金通帳を受取つて、いそ／＼と立ち去つた。これは富山市立町に住む山崎コトさんであつた。冷靜に考

へて見れば、貯蓄銀行の最初の預金者として、山崎さんこそ最も適はしい人であつたのである。當時の行員にとつて、山崎さんの面影こそ銀行生活の記憶から生涯消し難いものであつたと、今も語り傳へられてゐる。

開店の翌日にも、山崎さんの顔が店頭に現れた。預入れたのはやはり金一圓であつた。更にその翌日にも山崎さんの姿が見られ、通帳にはまた一圓が書加へられた。其の又翌日にも、かうして鳥の鳴かぬ日はあつても、山崎さんの姿が見られぬ日はなかつた。一圓貯金はいつまでも／＼続く様に思はれた。銀行休日の翌朝は必ず二圓が預けられた。若い行員達は山崎さんの努力が、何時まで續くかに興味を抱いて眺めてゐたが、その繞まぬ精進を見るに及んで次第に驚嘆を感じ

すには居れなかつた。何となく畏敬の念さへ生ずる様になつた。毎日の應待であるので、相互に深い親しみも自づから出来て、山崎さんの姿が店頭に現れるのが遅れると、心待ちに待たれるのであつた。當時は、勞賃も廉く、物價も安かつた、北陸地方は文化の進歩も遅れて居ただけ、庶民の生活程度も未だ至つて低い時代であつた。月收二三十圓もあれば、一家四五人が氣樂に生活出来たのである。身なりなども至つて粗末な山崎さんが、毎日缺かさずに一圓宛貯金するといふことは、容易ならぬ努力である。寧ろ奇蹟の様にさへ行員達には感じられたので、深い好奇心から、人知れずその素性を詮索して見るものもあつた。しかしこれは奇蹟でも何でもなかつた。弱い一未亡人が不退轉の精進の尊い結果である事が判明しただけである。山崎さんは當時二十八歳、數年前に夫に死別して、今は女手一つで立町に小さな菓子店を營んで居た。商賣の暇には、他家の針仕事や、賣藥の下仕事もした。かうして夜も晝も一心不乱に働きつゞけて得た一日の利益の中から、毎日正確に一圓宛の天引貯金を實行したのである。明治二十年代の富山は未だ市民の氣分に封建時代の城下街らしい悠暢な名残を留めてゐた。生存競争の激しい波は、こゝまでは押寄せてゐなかつた。

町家の内儀や娘達は、春秋の祭禮ともなれば、美しく着飾つて幾日も親戚知己の家を遊び歩い

た。未明から化粧を凝して芝居見物にも行つた。雪の夜は炬燵を圍んで茶舌話に時刻の移るのを忘れるといふ風であつた。然し山崎さんはかうした遊惰な習には目もくれず只管に働きぬいた着物はいつも洗濯のきいた木綿物であつた。後に聞いた話であるが、此頃から山崎さんは近時盛に推奨される七分搦の米を常用してゐたさうである。さうした故か嘗つて醫師の厄介にならないで暮した。

他人に迷惑は懸けまい、これが山崎さんの信條であつた。働くことゝ貯蓄することが生活のすべてであり、こゝに楽しみもあれば、慰みも發見されたのである。

「菓子屋のおコトさんは働き者やなあ」

「もう嘸かし貯めた事やろ」

「若い身空で働いてばかりゐなさる。あれでよく續くものだね」

「あの人は子供もないのに、あんなに貯めてどうする積りだらうね」

「死んでから、あの世まで持つて行けるものでもないのにさ」

「どう？明後日の芝居へ誘つて見たら」

「あの人が芝居見物などに交合ふものかね」

口さがない近所の内儀達の噂が、山崎さんの耳へも入らないでもなかつた。しかし堅固な意志は微塵も揺がなかつた。たゞ信心深い山崎さんは月に二三回のお寺詣を怠らなかつた。

佛教の盛んな土地に生れ育つたこの孤獨の寡婦の魂には、説法を聴聞する度に、彌陀の大悲が水の様に深く滲透つた。朝な夕な、自家の佛壇にお燈明をあげて、看經する毎に、感謝の念が溢れ、次いで新しい勇氣が振ひ起された。かうした時山崎さんの胸中に、閃く一つの希望があつた。それは早くよい養子を迎へて、この山崎家の名跡を嗣がせたいといふ事である。結婚生活の期間は短かゝつたが、之も宿世と思へば諦めもつく、然し永く續いた山崎の家名を斷絶させては祖先の靈に申譯がないと思はれた。三十年、四十年の後、年老いた己れが數多の孫達に取圍まれて一家團欒してゐる楽しい光景も、時折幻の様に念頭に浮んで來る。之等の孫達の爲にも！さう思つて山崎さんは更に一生懸命働いた。一圓の天引貯金は熄まず續いた。

月日が夢の様に過ぎた。明治三十一年一月二十五日、貯蓄銀行は開店五週年を迎へた。堅實な營業方針と、行員達の心を一つにした不斷の努力が報いられて、業務はこの五ヶ年間に隆々として旭の登るが如く發展して行つた。今は富山地方民の無くてはならぬ貯蓄機關として絶大の信用を博してゐる。この喜びの日を迎へて、行員達の面上は、いづれも晴々と輝やいてゐた。この日

はまた山崎さんにとつても生涯忘れ難い思出の日であつた。五ヶ年の精進が一先づこゝで實を結んだからである。毎日一圓の天引貯金が積り積つて、實に元利金二千百一十一圓二十九錢に達してゐた。僅か二千百餘圓と嗤ふなかれ、四十年前の二千圓の價値は、裕に一資産を爲すものであつたのである。正に満願の日である。行員一同もわが事のように喜んだ。さうして山崎さんの忍苦の跡を想つて、敬虔の念にうたれずに居られなかつた。貯蓄銀行の使命といふものが、今更の如く身に沁みて痛切に感ぜられた。この日山崎さんの姿が店頭に現れると、出納主任を始め、手の空いてゐる行員達は、期せずして駆け寄つて、

「お目出度う御座ります。山崎さん萬歳！」と叫んだ。

「有難う御座ります。お蔭さまで、これも貯蓄銀行と皆様のお親切なお力添へがあつたからで御座ります。有難う御座ります。有難う御座ります。」

といつて丁寧な頭を下げた山崎さんの眠にはかすかに涙さへ浮んでゐた。

かうして此の日二千百餘圓の普通貯金が、そのまゝ定期貯金に預け替へられた。一日一圓の天引貯金が一先づ結末を告げ、今迄雨の日も、雪の日も店頭に現れた山崎さんの姿が、暫く跡を絶つた。行員達にも毎日見馴れた姿が見えぬので、その當座は何となく、物足りない一抹の寂しさ

が感じられた。

(二)

明治三十二年孟蘭盆を前に控へた八月十二日の夜打續く炎天の暑さも萎つて、晩くまで涼をとつて居た人々も漸く夢路に入つた零時半頃であつた。富山市の南端に當つてかすかに夜空を照らす炎が見えた。火事だ。警鐘が寝入端の市民の耳朶を貫いて鳴り響いた。火元は中野新町の質屋桑田安左衛門方であつた。折柄凄じく吹き出した南風に、火の手は忽ち四方に擴り數ヶ處に飛火して、火は生あるものゝ如く縦横無盡に狂ひ廻つた。防火設備の至つて不完全な當時の事である。市民は業火の前に手の下し様もなくたゞ右往左往にするのみであつた。かうして富山市の約七割までが灰燼に歸した。縣廳、市役所其の他銀行會社等の目星しい建物は始ど一字を剩すことなく焼亡してしまつた。

市民の大半は罹災者であつたから鎮火後の慘状は目も當てられぬばかりであつた。幼児を抱き老いたるを擁して灰燼の中を彷徨する無數の人々の姿はさながら地獄の亡者の如く、當時を回顧するだに身の毛の慄つものがあつた。富山市の復興は一時絶望かとさへ思はれたが、三百年の歴史

史を通じて富山賣藥の聲名を天下に謳はれてゐる市民は父母の土をこのまゝ廢墟に化せしめる事はしなかつた。不撓不屈の越中魂は不死鳥の如く灰の中から蘇つて近代富山の建設を目指して奮ひ立つた。

山崎コトさんの立町の住居も、災禍を免れる事は出来なかつた。継るべき男手もない、寡婦の身として、獨り焼跡に悄然と立つた時の心細さは如何ばかりであつたらう。然し女ながらも山崎さんこそ堅忍不拔な越中魂の化現であつた。他人に迷惑は懸けぬ。幸ひにも自分には五ヶ年の努力の結晶である二百餘圓の貯金がある。今こそ之を活用すべき時ではないか、さう心に思ひ決めると直ちに貯蓄銀行に駆けつけて見た。貯蓄銀行も罹災の憂き目に逢つたが、庶民の大切な金融機關として暫時も活動の停滞が許されない、むしろかゝる際こそ行員達の献身的な奉仕が切に要求されるのであつた。コトさんが一年半振で訪れた時は已に假家屋を設けて營業を始めてゐた行員達は山崎さんの無事な姿を喜んで、何かと便宜を計つて呉れた。かうして貯金の中一千圓を引出し、近隣に先じて山崎さんの立派な新宅が建築された。この事實は社會人心に對する一つの活きた教訓であつた。尠くとも山崎さんの平生を知る附近一般の住民に、勤儉貯蓄の精神を深く植ゑ付けたものである。

富山市民の氣風も、この大火を轉機として一變したかの様に思はれた。偷安姑息の風が除かれ、勤勉努力の越中人の本性が新に目醒め来て、社會百般の事象に於て、徐ろに積極的な動向をとらんとする潑刺たる意氣が現れ初めた。山崎さんの小やかな新築家屋は、この復興富山の前途を象徴するものゝ様であつた。

## (三)

更に十二年餘の星霜が流れた。山崎さんの鬢髪にもいつしか白いものが加はる様になつたが、相變らず健康に働き續けた、定期貯金はその後幾度か支拂期日が來たが、其度毎に若干額宛正確に預け足されて貯金高が次第に増加して行つた。明治四十三年一月、貯蓄銀行が創立十七週年を迎へた時は、五千三百五十圓の巨額に達して居た。さうして同年四月には、山崎さんの多年の念願が、漸く叶へられて、養子林次郎氏を迎へる事が出來た。

林次郎氏は土地の師範學校を出た堅實そのものゝ様な頼母しい青年であつた。山崎さんの鑑識に狂ひなく、林次郎氏は稀に見る孝心の深い青年であり、親の言に嘗つて反いたことはなかつた。實の親子と變らない睦じさは近隣の美望の標であつた。更に五年を経て林次郎氏は妻を迎へた

が、家庭は相かはらず圓滿であつた。間もなく長男が生れた。次いで次男、三男更に長女が續いて生れた。實の子に恵まれなかつた山崎さんも孫には實に恵まれた人であつた。寂しい孤獨の日に描いた山崎さんの夢は遂に實現したのである。老いた身をまめくしく動かして孫達の世話に餘念ない山崎さんの頭には霜が深く下りてゐても、身邊には絶えず暖い春風が吹いてゐる様であつた。之で祖先に充分申譯が立つた。嬉々としてこの祖母の周圍に纏ひつく元氣な孫達の姿を眺める眼には、いつも感謝と安堵の光が和やかに流れるのであつた。若竹の伸びる様な勢で幼い者達は成長して行く、孫達はやがて學校へ通ふ様になつた。林次郎氏の教員生活も年月が加はると共に、その地位が次第に昇進して市の小學校教育界に於て最も前途を囑目される一人に數へられてゐた。然し勞多くして酬ひられる所の最も少いのが教師である。殊に清廉そのものゝ様な人格に養母から薫陶を受けた林次郎氏に生活の苦惱が年と共に加はつて行つた事は、當然であつた。學校の成績が飛抜けて良い子供達は何れも向學慾に燃えてゐる。林次郎氏は長男をその希望に任せて、富山高等學校の尋常科に入れた。然し尋常科の上に高等科があり、更に大學がある。しかも次男、三男が直後に續いてゐる。乏しい小學教師の經濟力を以つて果して大學まで通し得るものであらうか。親戚や近人の中には、ひそかに蔭口をいつてゐるものもある。然しこの



子供達の向學心を自分は抑止出来ない。しかも教職に在る身としてそれが堪へられるものであらうか、せめて子供達の成績が普通以下でよもあれば、諦めもつくが、親の慾目で見ても、高い教育を受けさせればそれだけ多く國家社會に役立つだけの器量を各自に具へてゐる事は、自分が教壇から多數の兒童を眺めてゐる身であるだけによくわかる。

かうして林次郎氏の惱みは日毎に深まつて行くばかりであつた。林次郎氏の物思はしげな屈托の色が、慈愛深い母親の胸に映らない筈はなかつた。殊に若い折から浮世の辛酸を嘗め盡して來た山崎さんであるから、疾くに林次郎氏の惱を知りぬいてゐたが、たゞ口に言ひ出すべき機会を靜かに待つてゐた。然し終日の勤務に疲れ果て、歸る林次郎氏の深い物案じ顔を見てゐると、山崎さんもさう久しくは堪へてゐる事が出来なかつた。

「林次郎や、お前近頃大層心配さうな顔色をしてゐるが、どうかしたのかい」

「いゝや、お母さん、心配なんて何もありませんよ」

孝心深い林次郎氏はすぐに打消した。

「しかし顔色がよくないよ。母子の間で何も隠す事はないぢやないか。私の思過ごしかも知らないが、孫達の將來の事で物案じをしてゐるのではないかね。」

「マア、お母さんが其處まで仰有つて下さるんでしたら申上げますが、實は其事なんです。」

「孫達は皆、學校がよく出来るんで、私も嬉しいよ。近邊の人達だつて會ふ毎に譽めて呉れるんで私もお蔭で鼻が高いよ。」

「はあ、他人が譽める程でもないでせうけれど、とにかく相當な成績をとつて來ますので、あゝして俊治も高等學校まで入れましたけれど、どうもこの後が大變だと思ふんです。大學を出るまで、あと十年はかゝりますからぬ。とても小學校教員の腕では覺束ない氣がします。いつぞ中學校か商業學校だけ卒業させて、早く世間へ出した方がよくはなかつたかと今になつて思ふんです。」

「私は昔の人間で分らないけれど、高等學校に居る人は、何れ皆大學へ行く人達ばかりぢやないかね。今更俊治を他の學校へ變らせるわけにはゆくまいだらうし、それにあれ程勉強の好きなものを中途で罷めさせるつて事は、第一可哀さうな話ぢやないか。お前も師範を出てこの家へ來た當座は随分上級の學校へ行きたがつて居たやうだつたが、家の都合でやれなかつたのを私は今でも残念に思つてゐるよ。」

母の言葉に、林次郎氏は、ふと少年の日に描いた夢を想出した。東京への遊學、それはどん

なに強い憧れであつたらう。自分の生涯に於て叶へられなかつた望を、せめてわが子の代に成就する事は出来ないものであらうか。林次郎氏の胸は餘計に重くなるのであつた。

「學校が終へるまで、どれだけの學資がいるのかい。」

「さうですね。大學と高等學校でさつと五六千圓はかゝるだらうと私は見積つて居るんです。私共の力では到底見込のない事なんです。それに登も、舛もすぐに下にゐるのですから、俊治にばかり力を入れるわけにまゐりません。」

「五六千圓かね、それだけで出来るものならあのお金を費つたらどうだらう。」

「あのお金つてお母さん、どれですか。」

「私が若い時からもう、三十年餘になるがね。すつと貯蓄銀行に預けてゐるお金なんだがね。」

「貯蓄銀行にお母さんの預金のある事は知つてゐます、がそんなに多額にあるんですか。」

「多額といふ程ぢやないけれど、預けてゐる年月が長いから、利が利を生んで今では相當まとまつた額になつてゐる筈だよ。一萬三千圓位あるかも知れないね。」

「それだけあれば、子供達の教育費には充分です。それを費はせて頂けますか。」

「あゝ、どれだけでもお費ひなさいよ。あの金で孫達が偉くなつて呉れれば私も満足だよ。私

も若い時から随分辛勞を重ねて来たけれど、少しづつ貯蓄して来たものが、今こんな風に役立つて呉れるとは、ほんとに有難いと思ふよ。銀行に預けてゐた甲斐があつたとつくづく思ふよ。」

山崎さんの老の眼にも、うつすらと涙が光つてゐた。さうして三十餘年の昔、貯蓄銀行開店當日の風景がまさ／＼と浮んでゐた。幼い者達は健やかな寢息を立て、眠つてゐる。奥の間には俊治君が餘念なく明日の豫習をしてゐる氣配がした。

## (四)

かうして昭和の聖代の餘澤の中に、とりわけ光明に包まれた山崎さん一家の平和な生活が続いた。林次郎氏は次第に榮進して、現在富山市隨一の柳町尋常高等小學校に校長として、時局下の國民教育に懸命に努力してゐる。長男俊治君は、金澤醫科大學三年に在學し、明年は愈々螢雪の功を了へる筈であり、次男登君は富山高専學校に、三男舛君は富山中學にあつて勉學中であり、長女佳乃さんは未だ小學校である。昭和十二年六月の半、山崎コトさんは林次郎氏夫妻と四人の孫達に取圍まれながら七十二年に亘る勤勉努力の生涯を終へた。まことに安らかな大往生であつた。信仰心の篤かつたこの女性の靈は今や彌陀の淨土に在つて山崎一家の繁榮をやさしく見守つ

て居るであらう。

其貯蓄銀行の据置貯金口座は、今なほ山崎林次郎氏名義の五千圓が備へられてゐるが、この貯金こそ半世紀に亘る『貯蓄精神の真髓』を無言の中に語り傳へてゐるものである。

### 三等當選

## 家船の船頭

新潟市外笹口

野口三史郎

### 緒言

人間が自己の勤勞所得を明日の爲め將來の爲めに貯蓄することは、其だけでも實に立派な道德的行爲である、政府は長期應戦に備へてこの際國民をして出來得る限り勤儉貯蓄せしめて今後

對應する必要性を痛感して、國民貯蓄運動を展開せんと、著々實行に入つてゐるのは近頃胸のすく様な快事である、吾人は國策遂行の上から此際勇猛心を發揮して貯蓄報國の實を上げねばならぬ、元來貯蓄は國策なるが故に、又は非常時局なるが故にやらねばならぬと云ふ性質のものではなく、平時であつても當然勤儉力行により貯蓄する義務がある。

世間には貯蓄の話などをすると直ぐ拜金宗だの、やれ守銭奴だのと、卑しむ風が今尙國民の間に浸潤してゐるのは事實である、従つて貯蓄の必要を痛感してゐる人でも成るべく口外することを憚り、又貯蓄の話などは遠慮してゐる有様である、斯様な弊風は一日も早く打破する必要がある、畏も『勤儉産ヲ治メ』と、仰せられし聖旨を奉體して分に應じた貯蓄をする事は立派な御奉公である、何んの憚ることも何んの遠慮する事も無い筈である、堂々と發表もし研究もして相互に國力の充實に邁進すべきで、一人の貯蓄はやがて日本全體の國力に關係することを忘れてはならぬ、我が國民を九千萬人として、一人一日に一錢づゝ儉約するとせば

○一日に九十萬圓。一ヶ月二千七百萬圓

○一ケ年 三億二千八百五十萬圓となる。誠に驚くべき大金となる

又社會問題の如きも見方によつては眞の貯蓄精神を無視した處に其病根があるとも謂へる、自

ら備へず、徒らに他に依頼するが如きは一種の矛盾ではあるまいか、聊々貯蓄は廣義に解すると金銭のみに限らず勤儉、克己、協力、等の徳目を實踐することに依り知らず識らず人格の向上も出来る、此の高尚なる貯蓄精神に立脚して貯蓄報國を爲す事は國民の義務でなければならぬ、故に貯蓄はどこまでも自發的でほしい。

### (一) 貯蓄の動機

私は現在一小學校長として國民教育の重職に在る者で自己の職業が誠に尊く且つ其責任の重大なるを自覺してゐるものである。私をはじめて教職に携はつた大正元年當時私は俸給十六圓大正三年には十八圓に増給、同職にあつた前妻と結婚したが當時妻の俸給は十四圓、夫婦共稼ぎで母を入れて三人暮し、當時の小學教員としての生活には何等脅威も感ぜずゐた。當時縣下第一の校長が五十五圓で其に比較すると二人の合計三十二圓は過分の氣もして心竊かに我家の春を讀へた位であつた。

月に叢雲花に風とやらで、世間は兎角思ふ様に行かぬもので最愛の妻は病氣の爲め入院散々費用をかけたが遂に此の世を去つて行つた。私の悲嘆は一通りでなかつた、若い身空にも熟々無

常を感ずると同時に人間は一寸先は闇であると言ふ諺を心の奥底から認識した。一方貯金は無くなる収入は激減する私の生活には經濟的に不安を感ぜずにはゐられなかつた、其後一年程で後妻を迎へたが之は同職ではなかつたが身體強健で、意志も強く、且つ貞淑で、私の選擇條件に合致する良妻であつた、併し私の歴一本では誠に心細さを増すのみであつた、それなのに時恰も歐洲大戰の勃發に依り物價は騰貴する一方、實業界の好景氣に引きかへ小學教員など全く生色がなく、轉業者簇出の有様であつたが私は目的の一定不變は成功の要訣だと信じてゐたので、其方は見向きもしなかつた、此の苦しい中に長男が生れた。無心の幼兒の笑顔を見るにつけ、將來立派に教育をしてやり度い親心が緊々胸に迫るのであつた、元來私自身は小學校を出たのみで正式の教育を受けてゐない、總べて獨學に依り試験で資格を獲得したのであるが、同一資格でも學校を出ない者は餘りにも割合の悪いもので、官界ばかりでなく教育界も同様である其關係から自分の子供は立派な學校を出してやり度い念願は人一倍強かつた、其れにしては學資の備へが必要で其上勤務地は都會(新潟)で生活費は嵩む、それに不時の不幸に苦しい経験を嘗めてゐる私としては、安閑と暮してゐられない、萬難を排しても貯蓄しなければと云ふ心構が油然と湧き上つて來た、是れが私に貯蓄の決心を起させた動機の主なものである。

## (二) 貯蓄と一家協力

『協力は強力』と云ふ標語の様に一家の協力がなければ貯蓄の實は結ばぬ、尊徳翁夜話に曰く『家のことをば俗に家船と云ふ、面白き俗語なり、家をば船と心得べし、是を家とせば主人は船頭、家内の者は乗合なり、世の中は大海なり、然る時はこの家船に事ある時は皆通れざることにして船頭は勿論乗合せたるものは一心協力して此の船を維持すべし云々』一家は常に此の心を心として協力しなければ所詮家政はうまく行くものでない、従つて貯蓄など成功の見極めが薄い、そこで、私は一家の幸福の爲め大にしてはお國に御奉公する爲め、本格的に貯蓄の決心を固めると母と妻に自分の決意を打明けて協力を求めた、妻は非常に感激して協力を誓つた、母も勿論賛成で眼に嬉し涙が光つてゐた、それからの我家には潑刺たる生氣と緊張した和合の氣が漲つてゐた。

## (三) 貯蓄の本義

愈々貯蓄を實行する段になると過ぎたるは及ばざるが如しの格言の様に、兎角消費節約の本義

を違へ、健康榮養を無視して、體位の低下を來し、修養方面等を等閑に附する様になるのが一般である、是では眞の貯蓄でない、要は無駄を省き『入るを圖つて出するを制する』の方則に依りて一舉兩得の方案により實行して行くべきである。例へば煙草を吸はぬことは金もかゝらず、健康にも良い、斯うしたことを焦らず撓まず意志の續く限り一步一步實行するより外に途がない、決して奇想天外の珍名案など有らう筈がない、寢てゐて果報を待つことや、濡手に粟式の考へは微塵も有つてはならぬ、それで私の一家では今後の貯蓄生活を持久的にやるには嚴守すべき事項を定めて之れを的確に守る事にした。

## (四) 貯蓄生活家憲

## 一 簡易生活の實行

私共の日常生活の幸福は能ふ限り自然に近い生活を營むことが經濟上から言つても健康の上から言つても幸福である、諸事簡單であればあるだけ蓄に金が要らぬのみか健康にもよくどれ程心安いか知れぬ、統計の上からでなく共世間には餓えて死ぬ人よりも食ひ過ぎて死ぬ人の方が多し、着物も汚れるのを氣にしてゐるものよりも品位を損ねぬ程度に於ける粗服の方がどれ程着

心地がよいか知れぬ、又住宅とても同様である、人間の生活は自然に近くなる程愉快であり、健康を維持する上にもよい、近來人々は金を遣つて自然に近づくべくキャンプなどをするのを見てもうなづける。

## 二 保健生活の實踐

「先づ健康」誠に意味深長な言葉である。貯蓄も大切だが健康はそれ以上大切だ、一家の保健は貯蓄と平行して行かねばならぬ。食物も安くて營養價のあるものを用ひねばならぬ、私の家では白米食を廢して半搗米と麥を用ひてゐる、住宅は市の中心を離れた土地高燥な處を選ぶ之れは不便ではあるが家賃も安く閑靜で健康上によろしい、つまり一石二鳥である。家内中成るべく徒歩主義で押し通す、又屋敷の空地を利用して園藝を楽しみ土に親しみ、規則的な生活、早起の實行、住宅の清潔整頓等、苟も健康上良い方法はやることにした、一家希望に燃えてゐて緊張してゐる關係が病氣など忘れたかの様に皆頑健であつた、私は煙草も酒もやらぬから一倍他家の主人に比して強かつた。

## 三 貯蓄に必要な生活改善

俸給生活者は増俸以外の収入の増すことがない、従つて出づるを制するより外にない、假令は

月收二百圓の人が月二十圓蓄積するより百圓の月收ではあるが月三十圓貯蓄する人は總計に於て百十圓多く収入ある譯である。此の要領で出来る限り無駄を省き節約して行くことが大切だ味噌を一例にとれば少しづつ小買するよりも、味噌屋に煮てもらつた方が約半値で、そして結構に戴ける、又必要の無い物は如何に安くとも買はぬ、調度品の如きも丁寧に使用せば永く使用出来るものである、私の母は三十年以上使用した鍋蓋を自慢してゐる、又御用きはおことはり、買物は全部現金買ひである、米屋など品の良いのを安くして呉れる、又必要やむを得ず物を買ふ場合は品の良いものにして安物を買はぬ、其他いくらかもあるが頭の働かせ方で仲々人の氣づかぬ名案もある。

## 四 感謝の生活

一度病に罹つた時に痛切に健康の有難さを感じる、毎日何等の不足もなく暮すことの出来る事を思へば感謝の念で一パイになる。何事によらず感謝の念に満ちてゐれば不自由も忍べるし不平も解消する、私の一家は常に感謝の生活をしてゐるから時に苦しいことがあつても決して不足を言はず一汁一菜でも感謝に満たされてゐると誠においしく食べられる。

## 五 生活の反省

孔子の様な聖人でも日に三省したと言ふが凡人の我々は常に自己反省に依り向上進歩を計らねばならぬ、貯蓄生活には日誌の記入家計簿の整理等が必要である、時々之れを参考とし反省したり、改善したりする外刺戟の材料共なるので決して無駄でない、日々の反省が大切だ。

六 豫算生活と天引貯金

小學教員などは収入が定まつてゐる、他の會社員の様に割増とか出張とか云ふものがない、又賞與金など無い所が多い、どうしても月収の中から生活を切詰められるだけ切詰めて、天引貯金をするより外に良い方法はない、それには豫算生活をして月々の天引に遠算を生ぜぬ様にしなければならぬ。併し餘り極端に切り詰め過ぎるのは永續性が乏しいし、又貯蓄の本義にも悖ることになるから注意せねばならぬ。

(五) 貯蓄計劃

一 第一次貯蓄計劃

如何に物價の高い現代でも現金一千圓は決して馬鹿にならぬ、一千圓を銀行へ預けて置くこと(當時の利率)六分として二十年間即退職の頃までには三千二百七十一圓になつてゐる事にな

る、そこで私は先づ一千圓を目標に天引貯金に依り之れが達成に邁進することにした、此の時機までに私の貯金はお辱しい話だが約三百圓あつたので、其殘高(差引)七百圓を四ケ年に完成する豫定であつた、資産家から見たらこんな少額と笑はれるでせうが薄給の小學教員では仲々の難事であつた。幸にも俸給令の改正で私の月俸も三十六圓になつた、併し此れだけでは月十四圓の天引は如何に切詰めても駄目である、仕合にも妻は裁縫に可なり自信があつたので人様に頼まれる儘に仕立て、上げてゐたが之の計劃が立てられると本格的に内職として私に協力することになつたので月々十圓内外を働いて呉れた、これで合計四十六圓位となり四ケ年七百圓の天引は十分自信が出来た。其當時の我が家の豫算を次に掲げて見る。

家計豫算表

収入之部	四六圓	内職給	三六・〇〇	金額	%
支出之部	四六圓	内職給	一〇・〇〇		
内譯費目	摘要				
住宅費	一軒建平家(三間)		七・〇〇		一五・二
主食費	半搗米、麥		六・五〇		一四・一
					八九

副食費	野菜、鹽、魚等	三〇〇	六・五
調味費	醬油、砂糖等	一〇〇	二・二
入浴費	四十回分	一・二〇	二・六
新聞雜誌		一・三〇	二・八
交際費		一・五〇	三・三
税金	(實は之以下である)	一・〇〇	二・二
電燈	二箇設備	一・五〇	三・三
薪炭費		三〇〇	六・五
雜費	主人小遣其他	三〇〇	六・五
豫備費		二〇〇	四・四
天引貯金		一四〇〇	三〇・四

備考 年末賞與金は依給の八割位 約三十圓  
 毎年水泳教師手當夏季一ヶ月 二十圓  
 合計五十圓位之れは衣服代等に繰入豫算面に現さず

薪炭の中、幸ひ家の裏山は松林にて松葉等多き爲め薪は殆んど買はず(子守をしながら母掻き集む)

斯うした切詰めた豫算で一家協力喜びと希望に燃えつゝ、四年間は夢の間に過ぎ十二月の終り最後の天引預入と同時に利子記入總計一千九十八圓七十三錢が浮び上つた、(當時の貯金通帳は今も保存) 一家は勇み立つて第二次計畫へと實行を移すべく張り切つた元氣であつた。

二 第二次貯蓄計畫

目出度く越年して愈々第二次計畫を元旦に當て母や妻に發表して一層の努力を誓つた、有難い事に俸給令が又々改正されて六十五圓となり又勤務校附設夜間授業囑託月額十二圓、年功加俸月額三圓支給され合計八十圓となり私の生活にも他少の餘裕も出来、此所に於て三千圓四ヶ年完成を目標に一家協力之れに猛進することにした、現在貯蓄約千百圓、三千圓より差引残高千九百圓現在貯金千百圓に對する四ヶ年の利子合計二百圓差引實際貯蓄高千七百圓年割にすると一ヶ年四百二十五圓となる、月割にすると約三十五圓となるこれ位の貯蓄ならば決して驚くことはないとの自信も出来愈々第一次の時以上の決心でスタートした。  
 妻は其後も相變らず内職を續けた。其中に弟子入をして裁縫を練習する者も二人出来て内職を



一層能率的にして呉れたので、月十四五圓は易々たるものであつた、それに子供は長男一人でどうした事やら出来る様子もなく家内は四人暮しで前と大差なかつた。斯うして生活に多少餘裕が出来ると兎角緊張味を失ひ勝ちになるものであるから大いに自ら誠めて一意貯蓄の實を上げることにした。月々の天引預金を銀行へ入れる役は母であつたが預金が豫算より少しでも多額の時は母は笑顔で出て行かれた、暮して見れば早いもので目標の三千圓は遂に報いられる日が来た、それのみか目標を越すこと、四百餘圓となつた、三千圓は一大威力である。今三千四百圓を定期預金として銀行へ投げて於ても月額約十五圓の働きをして呉れ私が第一次貯蓄の時には月額十四圓の天引は誠に血の滲む様な金であつた、然るに今や努力の結晶たる我が貯金が我家を後援する事になつた、そして衣服を着せるでなし、又食物をやるでなし一文の経費無しで働いて呉れるのである、私は貯蓄の興味を満喫することが出来たのである。

### 三 敷島貯金

私は酒も煙草も嫌ひなところから友人や同僚が不幸な人間だと同情して呉れた、教員生活に入つた当初から同僚が給仕に煙草を買はせるのを見て自分も買つた積りで一ヶ分を敷島貯金袋と書いてある袋の中に入れて置く、そして月末に纏めて銀行へ預ける、最初は俸給が低いので小遣

も切詰めてあるので思ふ様に出来なかつたが、第二次貯蓄計畫の實行に入つた頃から本格的に實行した、現在教員生活二十六年間に積り積つて八百二十三圓の貯金帳になつてゐる。今回の戦時公債を此の中から二百五十圓だけ買つた、残り五百七十三圓に今後も足す積りだ。

### 四 廢物貯金

古新聞や、古雑誌、金屑、ボロ屑等は丹念に貯めて置き、賣拂つた時には必ず貯金箱に入れて置く、それが一ヶ年積ると優に五六圓になる、我が家で此れをはじめて二十三年になるが其高積つて總計百四十六圓餘になつた、昨年長男（高等學校在學）が、すぐ大學へ進まねばならず生命保険の必要を感じ此貯金を利用して三千圓契約した、大學三ヶ年間の保険掛金は今少々足してやればよい。塵も積れば山となるの譬の通りである。

### 五 第三次貯蓄計畫

貯金は最初の千圓が最も困難だと實驗家から聞かされた事がある。貯金も土臺が出来ると案外樂の様に思ふ、私は第三次計畫として五千圓を目標として突進する事に決めた、當時月俸八十圓加俸五圓、其他賞與、夜間部、及水泳教師手當等の雜收入があり、支出之部としては家賃が著しく向上した、其他の費目も向上はしたが収入増加に比して増してゐない。否、私は生活程度は

一旦向上したら最期引下げられぬものと信じてゐたので警戒してゐたから月額三十圓位の天引で完成出来るものなら易々たるものと十分の自信があつた、さて此所に注意する事は貯蓄の倦怠期である、人間は神ではない、緊張の後には弛緩が来る私は二宮翁夜話や報徳實話などをよく家の者に讀みかかせた、一番よいのは貯蓄を趣味化することである、さて愈々實行に入つたが土臺の三千四百圓が飯も食はずに利子を働いて呉れるので月額三十圓足らずの天引でよい譯で苦しいとも思はず寧ろ興味を以て貯蓄した、人間は興味の有る處に疲勞は伴はぬ此れも計畫通りの四年間に完成した、そのみか多年克己生活を續けてくれた母上を京都参りをさせ、又私が妻や子供を連れて旅行もした、當時住宅難から家賃も騰り月々十六圓の家賃を支拂つてゐたが誠に不生産的な氣がしてならぬ、月十六圓づゝ十年間で二千圓からなる、茲に住宅建設の頗る有利であり且つ家屋敷等の不動産があれば社會の信用も違つて来る、斯う考へたので家内相談の上之れと一決、恰もよし市の高燥な松林間に分譲地のあるを幸ひ坪二十圓で四十五坪ばかり買うけ私の設計で庭も二ヶ所とり明るい二階平家混合の小住宅を建設した水道から電気、其れに不動産取得税まで入れて總計二千三百五十圓位で完成を見るに至つた、友人や同僚などから経費の少い割に感じのよい明るい家だと譽められた、其後土地の値上りで現在坪四十圓からする其上環境が良

いので三千圓位なら澤山買手がある、母も妻も貯蓄の有意義である事を一層認識し幸福感に浸つてゐた。

#### 六 第四次貯蓄計畫

新築家屋に對する感激は一家をして貯蓄を趣味にまで導入した、愈々最後の目標一萬圓へと猛進する事にした。一萬圓となると百圓の月給を吞す食はず全部貯めても八年間はかゝる、併し私には住宅新築費を除いて約三千圓の基礎が出来てゐる、其上特殊貯金も千圓ばかりある、そこで此の計畫を樹立した昭和四年には月俸九十圓加俸七圓其他で百圓以上となり妻も内職は依然として續けたので米代は働き出して呉れた、豫算表から家賃が消える貯金の利子は月十圓、天引貯金は三十五圓は苦しくなかつた、年額五百圓以上伸びる事になる、子供は三人産れた中二人だけ成長頭健である、二人切りの子供しかないので経費もさした事はない。今後八九年間に完成させ度い意向であつた。一家は今では貯蓄も殆ど習慣となつてゐる、併しながら餘り無理をせず粘ばるのが永續の秘訣だと考へてゐた併し緊張は缺かぬ様にした、學校の歸へりが遅い時でも他で夕食をする事は交際上以外には決してない、妻も私を理解して何時迄も待つてゐて呉れた、其頃の日誌の中に次の様な駄作もあつた、私共の生活斷片とも見られる。

遅く食ふ夕餉はうまし妻と吾が

飯や、足らず互に笑ふ

此頃から私の地位も向上し思はぬ入費を要する事もあつて月々同額の天引が出来ず、月に依り多少の差はあつたが繞ます倦ます貯蓄したので昭和六年末には豫定の年割額に達してゐた、同七年現任校の校長に任命増俸の恩典に浴し青年學校長も兼任其方の手當等で月收百二十圓、それに官舎へ移轉したので我が家は私の知己の教員に十七圓に借す事にした、電氣代も入らぬ有様で私の生活は誠に楽になつたが、目的は忘れなかつた、其れから現在に至る間は最高能率を上げる事が出来た、現在私の貯蓄は次の様な數字になつてゐる。

- 一、一五〇圓 縣教員互助會積立貯金
- 二、二五〇圓 國債(二十五圓券)
- 五七三圓 敷島貯金
- 三、〇〇〇圓 銀行据置貯金
- 二、四一七圓 當座預金(銀行)
- 二、三〇〇圓 不動産家屋、土地(建設當時)

合計 九、六九〇圓 一萬圓近きにあり

母は一萬圓を見ずして一昨年六月七十三歳を一期として逝去されたのは誠に痛惜に堪へぬ、生前家屋敷が出来たのは嬉しいと口癖の様に言つてゐられたのはせめても孝養であつた。

結び

私は月給十六圓の時もあつた。物が安すかつたにしても生きてゐたのが不思議な位である。併し矢張米を食つてゐた、人は月收の幾分かを貯蓄出来ぬ事はない、天引した残りだけの月收しかないと思へばよい、貯蓄は永續すると興味は湧く、それが趣味に迄至ると本格的である、貯蓄は人を健康にする、家内も和合する、其他數へたら何徳有るか知れぬ。一石二鳥の貯蓄を禮讚す。

誘惑と闘つて

埼玉縣北足立郡六辻村

井原隆吉

昭和三年二月二十三日此日こそ一生涯中最も苦しい體驗をした日であると同時に又私に貯蓄が絶對的に必要である事を痛感させ、即日而も永久に實行しやうと堅い決心をさせた最も記念すべき日でありました。それは私が十八歳縣下の某工場の職工で工業學校夜間部を卒業した春でした。一ヶ年前から病床にあつた父が此日突然危篤に陥り工場から馳付けた。私は不用意にも父の傍で「東京から名醫を呼んで見て頂きますか」と母に相談しました。母は父に見えぬ様流れ落ちる涙を拭きもせず指で〇を作つて見せるのでした。それは金は何處にあるのかの意味です。同時に私は、お前の力で苦面が出来たら是非さうしてくれと云ふ母の切ない心を讀みました。苦樂を其にした、特に茨の道のみを歩み続けた夫の爲に、父としての責任を果し切れない夫の爲に總る手當をしてやりたい、もう一度健康にしてやりたいと希ふ母の悲痛な動作でした。

哀願でした。父は父でそんな事はしなくともよいと云はんばかりに骨と皮ばかりの手を振つてゐます。四十才の働き盛りですもの、人一倍子煩悩の父でしたもの決して、諦めてゐたのではありませんでした。癒りたかつたのです。然し余りにもよく家の財政を知り過ぎてゐたのでした。今にも知れぬ命、覺束ない呼吸の下から懸命に手を振つたのでした。私は萬感の裡に、滂沱たる涙の中に母の指と父の手を同時に見たのです。「申譯ありません」と心の中で詫びました。同時に涙の中に強い決心をしたのです。此時の決心が仕事に、勉強に、貯金に將來活動の原動力となり、此時の母の指が父の手が瞬時も緩まぬ鞭となつたのでした。

其後二、三日で父は死にました。母（三十九才）妹（十二才）弟（九才）と私でした。一家の支柱を失つた私達は一時呆然として仕事も手に付きませんでした。然し私には長男としての父に代つて母を助け弟妹を教育しなければならぬ責任がありました。母を力付け、慰め、同時に兄さんと一緒によく勉強し家の手傳ひをする様誓はせました。それからの私は周圍から體が續くかしらと思はれる程働き出しました。そして總てが空想でなく現實的になり規律正しい生活へ引入れてくれました。

當時私は雑工から機械工の王子として機械部の助手となり日給九十錢残務手當を加へ平均月

卅圓位でした。父との死別と云ふ子としての最大の悲惨事がありました。不幸中の幸いな事は學校が卒へた事でした。本代月謝等が全部なくなり月給は丸取りになりました。父の死後始めての月給です。早速新しい位牌の前へ供へ將來無事で働ける様お願ひし又月給の五分を必ず貯金する事を誓ひました。そして翌日一圓五十錢を郵便貯金しました。生れて始めての貯金です。私が働いた財産でした。此時の嬉しさ少額でも自分名義の資産が出来た時の得意さ生涯忘れ得ない愉快さでした。何んと次の勘定日が待遠しい事か。月給か欲いではなく貯金残高の變つて行くのが待ち切れないのでした。私の家は父が火の車の中を持ち續けて来てくれた宅地が百坪ありました。從來小作農であつたのですが父の死後一町歩の借地（小作地）は全部返へして日當り良い畑を五畝程借り、母が野菜を作りました。幾分でも小作をしやうと母が主張するのですが、父の死が過勞が原因であつた事を知つた私は斷然借地全部を返したのでした。母は其五畝の畑から一年に季節毎に十種以上の野菜を取入れ、我々の副食物の大部分を占める野菜の自給自足を完全になし遂げております。収入の定つた私等は幾分でも出るのを制するより他に道がないのです。六ヶ月後の九月には貯金も十三圓程になりました。それは天引貯金の他に其月の諸支拂を引いて月給日に餘つた金は全部別通帳へ預入れ豫備金としました。翌月へは一錢も繰越さない決算貯金

です。然し「余りを貯めず貯めて余せ」とは思ひますがと仲々思ふ様に積みませんでした。十錢位きり余らぬ時等最初は郵便局の敷居が高い氣がしたものです。段々残高が増すにつれ、家計が緩やかになるに従ひ、こんな少しと思つた十錢が實に尊いものになつて來ました。「一錢を笑ふ者は一錢に泣く」と申しますが少しと思ひ無駄費ひした一年前を後悔します。私は平常余り健康ではなかつたのですが父との死別による緊張の爲か、幾分か蓄へに依り非常な希望を持つた爲か大變元氣になり朝體操の代りに可成生産的な仕事、薪作り或ひは宅地の空間三四十坪を利用した生花用の朝鮮楨、柾木、伊吹、花類等を作り一年間の収入十餘圓を得ました。此れは趣味を兼ね一石二鳥でした。此元氣は工場でも認められ模範工として表彰され日給一圓十錢になりました。丁度父の死後一年後です。

貯金額は二冊合して四十一、二圓でした。幾分家計も樂になりましたので貯金率を一割に上げました。決算貯金を加へると少なくとも一ヶ月四圓近い貯金でした。丁度三年間親子四人總動員の結果天引貯金百二十圓餘、決算貯金は父の一週忌法事に二十餘圓を費ひ残五十圓餘、合計百七十圓程の貯金でした。十年後の今日考へた時誠に情ない氣がします。然し今事變が突發以來消費節約、勤儉貯蓄、空地利用、精神總動員等大々的に時局認識を強調しておりますが此等の總て私

一家では十年前から實行して來たと考へた時徴力乍ら國家の爲になり、銃後の御奉公となつてゐたと思ふ時私の苦勞も誠に有意義であつたと愉快でなりません。それから四年目妹が高等小學校を卒へ女工と云ふ本人の希望でしたが家事の手傳ひ旁、裁縫を習はせました、私も日給一圓四十錢でした、物價が非常に安かつたので樂になる筈でしたが弟が小學校六年を卒業した時でしたので夜學で苦勞した私は全部貯金を拂出して弟を教育しやうと決心し、ほど近い市立商業學校へ入學させました、荒屋から商業學校の制服を着せて始めて送り出した時の兄としての私の喜び、母は嬉し泣きに泣き乍ら佛壇へ燈明を上げてゐました、三百何圓かになつてゐた貯金は、父に代つた私に、私達子供を護り續けて來てくれた母に此れ程の喜びを授けてくれたのです、それからの一家は今より一層引締めて働きました、家計は削れる丈け削りました、そして天引貯金一割の鐵則を斷乎として守り續けました。

二十二三才になつた私には工場等でも相當の誘惑がありました、勘定日には必ず悪友に誘はれました、如何に苦勞を重ねた人でも少し家計に餘裕が出來始めた時が最も誘惑に陥り易い時でありますまいか、私も勘定日には前月分が此れだけあるのだから一度位はと思つた時が度々ありました、然し其度毎に母や弟妹の姿が思ひ浮びました、そして忘れもせぬ死の直前の父の手

が母の指が矢繼早に私の腦裏を掠めます、この幻は總ての誘惑を撃退させ、鞭撻の強い／＼鞭となつてくれます、つまり子としての最も悲しい思出は轉じて私の百冊に優る修身書となつた譯です。

二十五才の末機械部副主任に拔擢されました、日給二圓です、年上の人もおりましたが、實地外の勉強が役立つて工場主に認められたのでした、天引貯金も、六圓位になり、決算貯金を合せ一ヶ月七圓以上貯金しました、そして開始以來七年天引貯金五百圓餘、豫備貯金八十圓程でした、豫備貯金は賞與職務手当等を加へ天引貯金の半額程になる譯ですが、妹の着物、弟の學費等で仲々増加しません、私は弟妹の事は何でも叶へてやり彼等の喜ぶ姿を見るのが楽しみです、よく年寄りの様だと云はれますが自然父親の様な氣持になつてしまつたのでせう、妹の晴着の喜びも、弟の學校の喜びも、母の神佛詣りの楽しみも、そして私の年寄りじみた楽しみも、總て準備貯金から生れて來ます、一家の圓滿は各々の職場での元氣に正比例します、家中の満足は、私にどんなに力強い勵みを與へたでせう、千圓足らず記入の二冊の通帳は一家の健康と、限らない氣樂さと、圓滿と、そして私に無限の元氣と活力素とを與へてくれます。

更に又私を元氣附けたものは弟の卒業でした、就職でした、縣下の有力銀行へ採用され月俸

三十圓です、身元保證積立等を差引き二十五圓程持参しました、其内五圓を天引貯金させ、残額は弟の希望に依り母の總入齒の費用にしました、弟が給料第一回を母の爲に費ふ事を自發的に申出た時私は父の死後始めての涙を流したのでした、嬉しかつたのです、弟が一人前の人間になつた事でも、母の満足な顔を見た事でもありません、父に代つて弟を立派な心の持主に導いた、云はゞ責任を半分果し得た喜びでした、當時三百何圓かの貯金があつたが爲の私の決断は終に弟を立派な社會人にする事が出来たのです。

更に又私を元氣附けた事は工場の繁忙でした、私の二十八才、昭和十一年末からです、従つて収入も増加し日給二圓二十錢残務手當た加へ月七十圓位取りました、天引貯金も一割五分に増率です、此外二十二才の妹の結婚を目先に控へて準備貯金を十圓弟の分から十圓計二十圓宛積立てました、二十三才の暮將來役立つ様和服仕立の免許を得て嫁がせました。

妹に對する責任の大半を果し得た兄としての喜びは恐らく自分の結婚でも此程の喜びは味へぬかも知れません、其費用三百余圓職工の自分としては一寸苦しい金額です、而し幾年先までの着物、日用品を多く、形式的なものは全部借りました、これは準備貯金で賄ひました。

よく好事魔多しとか申しますが私も樂をして濡手で粟の夢を見たばかりに思はぬ損失を招き

ました、それは投資と云ふ事に關心を持つた私は偶々非常な人氣で賣出中の十二回割引債券を十圓で一枚銀行からと、證券會社から一枚十三圓で十九枚計二十枚買ひました處、段々値が下り十圓五十錢にもなり噂では何處まで下るか判らぬとの事五十圓程損をして全部賣りました、經濟知識のない私等が値上りを夢見、更に割増金の僥倖を樂んだ罰として諦め、將來の良い経験となりました、「儲ける夢より預ける思案」とか私等には誠に良い教訓です、而し私の失敗の様に儲ける爲の債券でなく貯蓄の爲の債券なら樂しみを兼ねたよい投資物でせう（最近知つたのですが）

丁度十二年の一月から職工の爲に退職積立金制度が出来私等も百分の二宛積みました、此外事業主も積んでくれる筈です、利益の多少に依つて更に増額して積立ててくれます、利益が職工へも分配される譯で勞資協調等と云ふ立場ばかりでなく「宵越の金は使はぬ」式の職工氣質を幾分でも自然に矯正して行くでせう、此積立も始めてから一年半でまだ微々たるものですが幾年か先には一資産になります、自分で預金残高が見られない丈に楽しみがあります。

よく工場内で相當の収入のある人から借金の申込を受けます、病氣等の理由でしたら大概無利子で、名刺一枚の借用證書で貸します、そして機會を見て座談的に貯金を勧めます。

世の中に將來の考へもなく無駄費ひして二十圓三十圓の金に窮して、月始めから月給日を追つてゐる人が随分多いのではないでせうか、「これ小判、せめて一晩居てくれろ」と云ふ古川柳があります、平常何んの蓄へもなく無豫算で生活してゐる人が月給日に味はふ悲哀ではありますまいか。

昭和十二年八月頃から支那事變勃發の爲工場が俄然活況を呈しました、熟練工引留策からか増給されました、それでも約半分は何處へか相當の香餌に釣られて轉動しました、然し私は新設工場の相當な引抜き潜行運動がありました、私を育ててくれた工場の爲、自分の思ふ儘に動いてくれる機械の側を去る氣にはなれませんでした、斷乎として唯一人になつても踏止まる決心を固め三四年先まで受けた注文を追つてゐます、如何なる困難と戦つても天引貯金はしますと父の墓前に誓つた決心、信念は遂に私へ、こうした仕事への愛着、確固不動の精神を培つてくれたのでした。

今年の二月から機械部主任に昇進し、日給でなく月給百圓月手當二十圓となりました、其後二割の天引貯金は千八百圓を突破し、準備貯金は、手當賞與及俸給日の決算貯金(毎月四、五圓)を加へ約五百圓になりました、其他昭和十三年三月から新聞の折込ピラで見た某貯蓄銀行の月掛貯

金を始めました、一年二百圓(掛金十六圓四十六錢)です、天引貯金を増率してもよいのですが現在親子三人の家族は將來何人になるか判りません、其時率を減らす事は面白くないので自由な而も自分の結婚準備金として加入したので、この月掛貯金の爲に二つの投資口を教へられました、積金開始の爲銀行へ行き窓口の人から据置貯金の説明を聴き有利と考へ天引貯金の内から千圓を一年の据置貯金に預入れましたそれから事變公債の賣出をポスターで見て百圓券二枚買ひました、行員の話では何十億とか發行されるのだそうですが、其内二百圓です九牛の一毛とは良く云ひますがそれより少ないかも知れませんが、然し國民の務を果したと思ふと誠に愉快でなりません。

母は最近宅地續きの土地一反五畝歩(千五百圓位)を買ふ事を盛んに主張します、此れは母が家へ来た直後明治四十三年の大洪水の爲被害を受け、安く手離した土地で父も生前あれだけは取り戻し度いと口癖の様に言つてゐたそうです、此れは是非共本年中に買取り父の墓前に報告する考へです。

私の過去十年間の貯金生活は即ちあらゆる誘惑との闘争生活でした、そして此れに打勝たしめ、將來も襲ひ掛つて来るであらう總ての誘惑を撃退させてくれるものは、死の直前の父の手で



あり、母の指でありませう、この幻、詰り生涯中の最も苦い経験は、十年間に二千數百圓の財産と、金では買ひ難い、精神力とでも言ふのでせうか強い／＼信念を授けてくれました。

社會生活をして行く上に於て色々な困難に會ふ事は澤山ありますが物質上の苦しみ程辛いものはありません、ですから一番悲惨な事に出合つた時決心した行爲は仲々中止する事はありません、私も最初決心した、佛前に誓つた天引貯金、一ヶ月決算貯金は絶対に中止しません、貯金残高が殖えれば、殖える程、収入が増せば増す程、家計は削れるだけ削る考へです、然し世間との交際も自分の、趣味、娯樂も無視するのではありません、吝嗇にして交際もしなかつたら、人々から敬遠されます、自分の趣味も娯樂もない人は心に裕も慰安もなく、片寄つた人間になるかも知れません、働く爲の慰安、讀書、團體生活上必要な交際は必要です、同時に生活上出來得る限りの節約、節約して貯蓄、これは個人として必要なばかりでなく、國家社會の爲、特に非常時日本に於ては必要でなければなりません、幸か不幸か十年前私に與へてくれた自然の苦難は、節約、貯蓄に對しては確固不動の主義を授けてくれました、そして十年前一圓五十錢から開始された二冊の通帳は現在家内三人に激刺たる元氣を與へてくれます、人も美む程圓滿に暮らせてくれます、妹を幸福な主婦としてくれます、弟をスマートな銀行員として送り出させてくれます。

す、そして私を三十才の主任サンにしてくれました。父の生前の希ひ土地の買入、弟の分家、來年早々に決定した私の結婚等々私一家の春は此の通帳が順々に而も確實に運んで來て來れます。

386  
531

昭和十三年十月一日印刷  
昭和十三年十月五日發行

非賣品

東京市麹町區丸ノ内一丁目八番地一  
社団法人 全國貯蓄銀行協會内

編輯兼 發行所 齋藤章

東京市日本橋區蠣殼町一丁目十番地

印刷者 中津川康

東京市日本橋區蠣殼町一丁目十番地

印刷所 正文

東京市麹町區丸ノ内一丁目八番地一

發行所 社団法人 全國貯蓄銀行協會

不許  
複製

雄之社

終

